㈶岐阜市教育文化振興事業団報告書第２集

# 岐阜市
# 北山３号墳

１９９８

㈶岐阜市教育文化振興事業団

北山３号墳全景（西上空から）

北山３号墳全景（西上空から）

# 例　　言

1　本書は岐阜市北山２丁目に所在した北山３号墳の発掘調査報告書である。

2　調査は、団地造成に伴う事前調査として、(財)岐阜市教育文化振興事業団が平成10年４月７日から５月20日にかけて行った。

3　発掘調査に要した経費は、株式会社東海地所が全額負担された。

4　発掘調査は、岐阜市教育委員会埋蔵文化財担当職員内堀信雄、(財)岐阜市教育文化振興事業団井川祥子が行い、岐阜市教育委員会高木　洋、(財)岐阜市教育文化振興事業団恩田裕之がこれを補佐した。

5　本書の編集は、内堀、恩田の協力のもと井川が行った。

6　本書の執筆分担は担当部分の最後に記した。

7　石材の実測図、一覧表、各種グラフは恩田が作成した。

8　現地調査及び整理作業参加者は以下のとおりである。

調査員　沢田伊一郎、調査補助員　棚橋英子

作業員　倉持和美・刈谷克已・安田忠夫・牧野利治・鷲見竜雄・臼井郷弘・可児　昇・山田定一

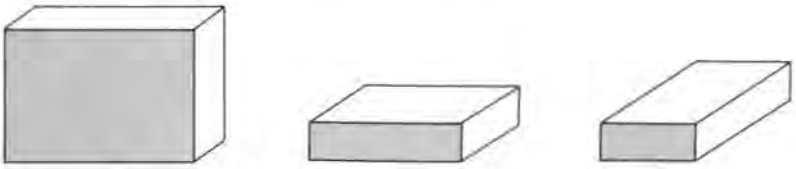
9　調査及び整理の過程で下記の方々及び機関より御指導、御協力を賜りました。記して謝意を表します。

八賀　晋（三重大学名誉教授）、中井正幸・鈴木　元（大垣市教育委員会）、渡辺博人・大熊茂弘・戸崎憲一（各務原市埋蔵文化財調査センター）、成瀬正勝（(財) 岐阜県文化財保護センター）、横幕大祐（池田町教育委員会）、尾野善裕（京都国立博物館）、中井　均（米原町教育委員会）、服部哲也（名古屋市見晴台考古資料館）、山田哲也（高富町教育委員会）

# 凡　　例

1　本書の基準点は任意のもので、山頂部を０ｍとした。

2　本書では石材の積み方を以下のように呼称する。石材の間を埋める小形の石は「詰石」とした。古墳に使用された石材はすべてチャートの割石である。




3　墳丘・石室の主軸は２つある。①：当初石室が崩壊していることがわからず、石室の中央と考えられる部分に設定した主軸。②：石室基底石を検出した時点で設定した主軸。よって図版にも２つの主軸が使用されている。第２～５・６(上)・10・11図は①の段階の主軸、第６(中)・７・12図は②の段階の主軸である。

# 目　　次

第１章　遺跡の位置と環境……1
第２章　発掘調査に至る経緯と経過……2
　第１節　発掘調査に至る経緯……2
　第２節　発掘調査の経過……2
第３章　遺　構……3
　第１節　墳丘……3
　第２節　石室……7
　第３節　遺物の出土状況……13
第４章　出土遺物……15
第５章　解体・図上復元……18
　第１節　解体に至る経緯・方法……18
　第２節　石材……20
　第３節　図上復元……20
第６章　まとめ……30
第７章　分　析……35

# 挿図目次

第１図　遺跡位置図――1
第２図　外護列石立面図(1)――4
第３図　墳丘平面図・墳丘断面図
　・外護列石立面図(2)――5・6
第４図　石室断面図(1)――8
第５図　石室実測図
　・石室断面図(2)――9・10
第６図　開口部石積み・閉塞石
　・排水溝実測図――12
第７図　遺物出土状況図――14
第８図　出土遺物実測図(1)――16
第９図　出土遺物実測図(2)――17
第10図　石室解体過程立面図
　（復元工程順）――18
第11図　石室解体過程平面図
　（復元工程順）――19
第12図　基底石復元実測図
　・石室復元図（案）――21・22
第13図　石材各辺のヒストグラム（上）
　・石材選択傾向（規格）
　グラフ（下）――23
第14図　各群毎の石材種類の比率（左）
　・石材種類毎の各群比率（右）――24
第15図　石室使用石材実測図(1)――26
第16図　石室使用石材実測図(2)――27
第17図　石室使用石材実測図(3)――28
第18図　墳丘構築過程模式図（案）
　・石室崩壊過程模式図（案）――30
第19図　北山３号墳類似石室集成――33
第20図　旧表土（焼土面）より出土した
　炭化材の位置と樹種――37

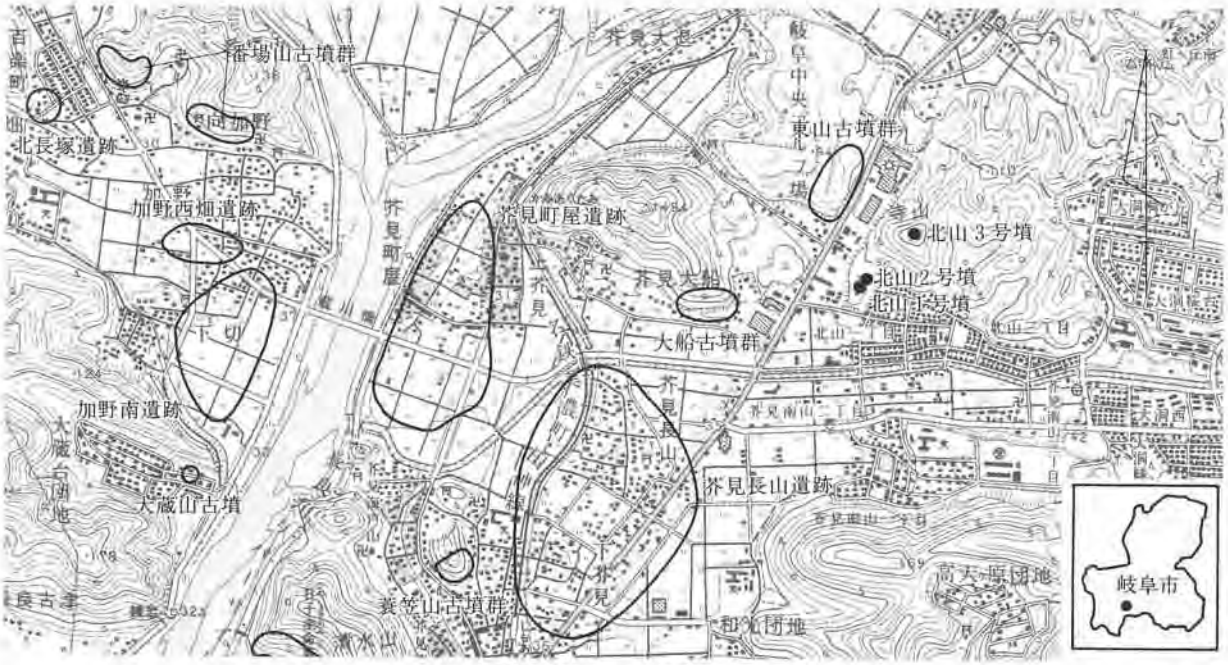
# 第１章　遺跡の位置と環境（第１図）

岐阜市は濃尾平野の東北端に位置し、市内中央部を長良川が貫流する。北山古墳群は岐阜市の北東部、西は長良川、北・東・南を山に囲まれた芥見地域にある標高117ｍの寺山の山頂部とその麓に分布する。北山３号墳は見晴らしの良い南北に長い山頂部の平坦地の南側を利用して築造されている。１号墳と２号墳は山の麓にあり、２号墳は墳形不明で両袖式の横穴式石室が開口している。芥見地域は、平野部と山間部とを結ぶ長良川と川沿いの道に接する交通の要衝である。

**周辺の遺跡**

長良川の左岸には古代～中世の大集落芥見町屋遺跡（旧一本松遺跡）、芥見長山遺跡、右岸には中世の大集落加野南遺跡が存在する。この付近は岐阜市内でも有数の遺跡密集地域である。芥見町屋遺跡は過去の発掘調査で弥生時代最終末期の住居跡や遺物が見つかっている。

古墳時代後期には長良川左岸に２基の横穴式石室を持つ円墳で構成される大船古墳群、２基の古墳がある蓑笠山古墳群と東山古墳群が、右岸の番場山には４つの群からなる番場山古墳群と横穴式石室をもつ大蔵山古墳ある。この時期の集落は分布調査でははっきりしないが、芥見町屋遺跡、芥見長山遺跡ともにある程度の古墳時代後期の遺物の存在が知られている。（井川）




第１図　遺跡位置図

（この地図は、国土地理院発行の２万５千分の１地形図（岐阜北部）を使用したものである）

# 第２章　発掘調査に至る経緯と経過

## 第１節　発掘調査に至る経緯

平成７年１月、岐阜市北山２丁目において宅地造成計画がもち上がった。当該地は周知の北山３号墳の範囲にふくまれていたため、岐阜市教育委員会と事業者との間で協議を行った。その結果、保存は困難であり、試掘調査の結果に基づいて、事業者の経費で記録保存のための発掘調査を実施することになった。平成８年４月17・18日に岐阜市教育委員会社会教育課が試掘調査を実施し、発掘費用積算の基礎資料を得た。平成９年７月22日、株式会社東海地所から文化財保護法第57条の２第１項の規定による届出が提出された。これに対し、平成９年７月31日、県教育長から発掘調査を実施する旨の指示があった。平成10年３月25日、（財）岐阜市教育文化振興事業団理事長から、文化庁長官あてに、文化財保護法第57条第１項に規定する埋蔵文化財発掘調査届を提出した。発掘調査は（財）岐阜市教育文化振興事業団が主体となって実施することとし、株式会社東海地所、(財)岐阜市教育文化振興事業団両当事者間で協議し、平成10年４月１日、業務委託契約書を取り交わし、平成10年４月７日現場作業を開始した。（内堀）

## 第２節　発掘調査の経過

平成10年４月７日から北山３号墳の発掘調査を開始した。連日の雨のため、実質作業を行うことができたのは作業予定日の内の１/３程度にとどまり調査予定を大幅に遅らせざるをえなかった。作業は表土を剝ぎ外護列石と地山（試掘調査で盛土はないと判断）の検出を行った。外護列石はすぐに検出でき、17日には南の開口部を除きほぼ円形に巡ること、一段であることが確認できた。石室内の埋土の除去は８日から開始した。石室内には天井石の一部と側壁の石材が多く転落しており、その除去に時間を要した。石室内の埋土は地山質の土に炭化粒が含まれていた。地山であると考えていた墳丘の土にも同質の炭化粒が含まれており盛土である可能性が高いとことが考えられた。そこで17日に北・東・西トレンチを設定して盛土の確認を行った。その結果、地山の上には炭化粒を多量に含む焼土が層をなしており、その上に厚さ30～50cmの盛土を確認した。石室内は21日に床面を検出し、石室奥壁近くから須恵器が出土。22日からは閉塞石の検出、除去を行い、その下から須恵器が出土した。23日には石室、外護列石の検出がほぼ終了し、写真撮影を行った。28日には石室検出状況の図化のためラジコンヘリを使用して写真撮影を行った。写真撮影後石室の解体とトレンチで確認された旧表土の広がりの確認のため盛土の除去を開始した。石室の石材には番号をつけて計測を行った。５月１日には旧表土（焼土）の広がりが石室を中心に円形に見られることを確認。焼土に含まれる炭化粒の樹種同定のためサンプリングを行った。７日には基底石部分までの解体がすすみ、右側壁は石室内へ転倒していることが確認できた。転倒した基底石を立て復元。基底石の下には多数の須恵器と土師器片が出土した。19日には基底石を除去し墓坑の検出を行った。その途中、床面と地山との間から耳環と鉄製品、須恵器の破片が出土。墓坑を完掘し、20日に発掘調査を終了した。（井川）

# 第3章　遺　　構

北山3号墳は山の頂上の平坦部南側と南斜面を利用して築造されている。平成8年度の試掘調査の際に行った地形測量とトレンチ調査で、外護列石が巡る径約11mの円墳であること、主体部は露出していた石材から南方向に開口する横穴式石室であることが推測された。表土下は地山で盛土は流失し、石室の残存状況は良好ではないと考えられた。これらの調査結果を踏まえ発掘調査を行った。

## 第1節　墳　　丘

**墳形・外護列石**（第2・3・18図）

墳形については、試掘調査で円墳と推測されたが、山の頂上部は南北に長い平坦な面があり、北側にも墳丘が伸びる可能性も想定して、表土を剥ぎ、外護列石と地山の検出を行った。外護列石は石室のほぼ中央を中心として半径約4.7mのところを円形に巡ることが確認できたが、南側の開口部では石列は確認できなかった。開口部は山道になっており削平されていた可能性が考えられるため外護列石が古墳築造時には存在したのか、それとも築造当初より存在しなかったのかは不明である。東西の残存する外護列石のラインを結ぶと開口部（南側）では距離、レベル共にほぼ排水溝の先端部にあたる。

外護列石の石材は10cm～30cm大で、大きさにバラつきが見られる。残存している外護列石は基本的に一段である。外護列石までの墳丘規模は径約9.5mである。墳丘が斜面に築かれていることから外護列石も地山に沿って傾斜して設置されている。

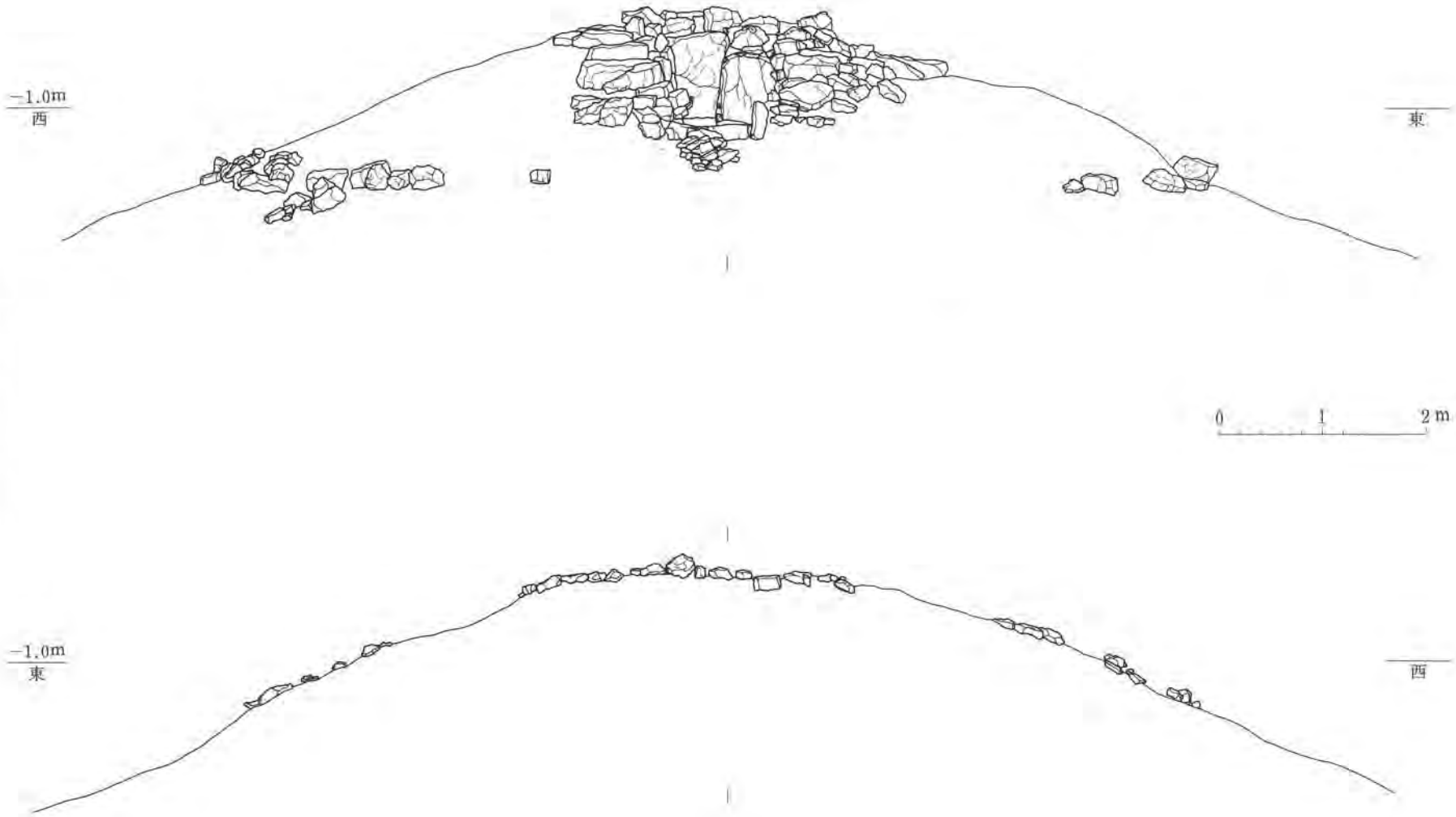
外護列石の下面は傾斜がきつくなり、そして平坦なテラス状になる箇所が見られる（第18図）。古墳の築造時に手を加えた範囲と考えられるが墳丘全面には見られない（第3図）。確認できる箇所から石室中央を中心として、径13mの範囲と推定できる。

**層位・旧表土・盛土**（第3図）

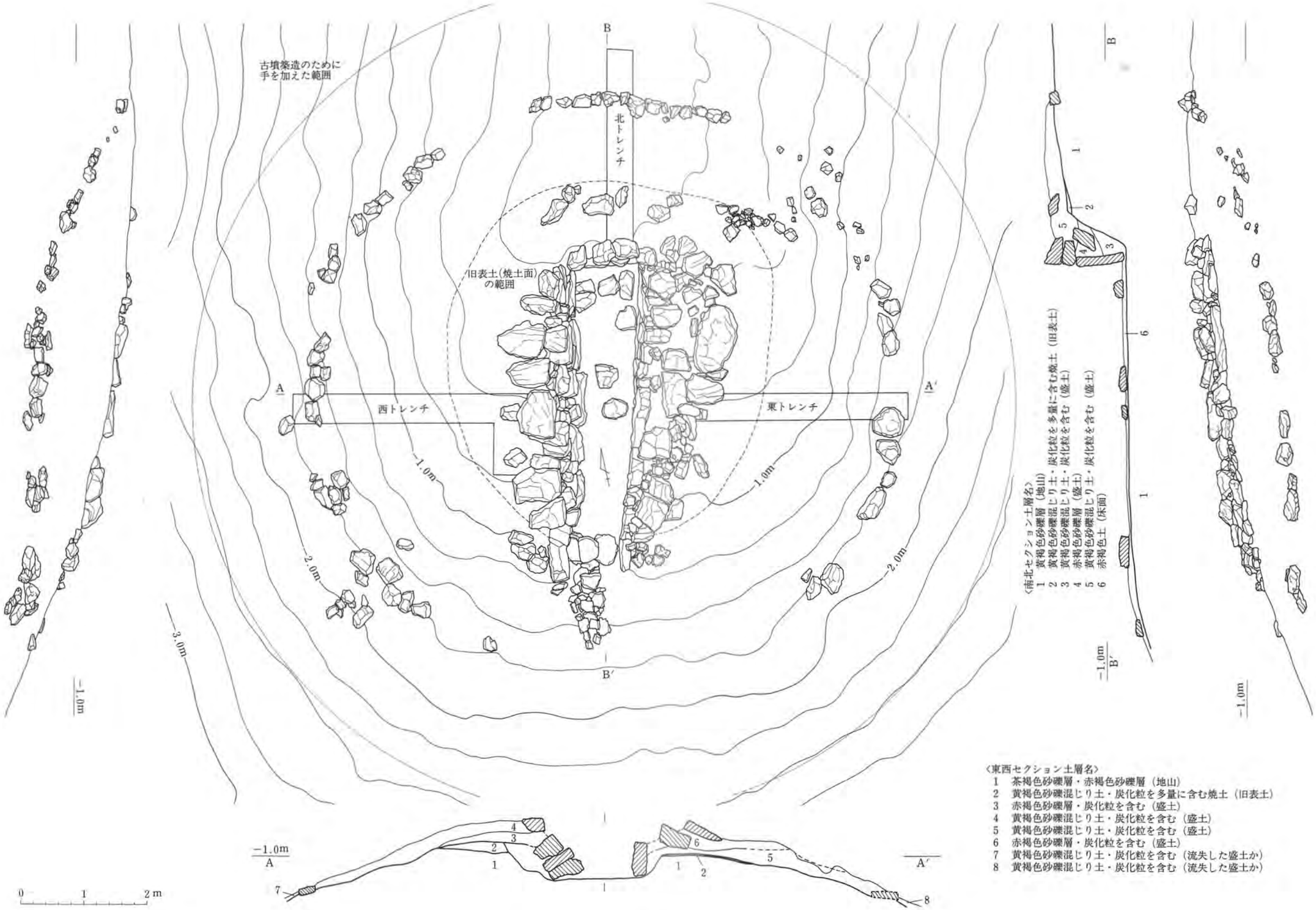
平成8年度の試掘調査では表土下は地山であると考えていたが、地山と考えた面（層）には炭化粒が混じり、地山ではない可能性が考えられたため、墳丘の盛土の有無の確認のために石室のほぼ中央の南北ラインを主軸として石室の北側（北トレンチ）、南北ラインに直行する東西ラインの石室西側（西トレンチ）、東側（東トレンチ）にトレンチを設定した。

その結果、表土下には炭化粒を含む砂礫混じりの黄褐色土、または炭化粒を含む赤褐色の砂礫土の盛土と考えられる層（厚さ約30～50cm）が確認できた。その下層には炭化粒を多量に含む焼けた赤褐色の固く絞まった砂礫層（厚さ2～18cm）と地山が認められた。

炭化粒を多量に含む焼土層は、北トレンチでは奥壁面から1.4m、東西トレンチでは側壁から2.1mの範囲で見られる。焼土面は緩やかに傾斜するが平坦である。しかし、2.1m付近から傾斜が変化して焼土面は見られなくなる。これらの結果を踏まえて盛土を除去し、焼土面の広がりを確認したところ石室を中心に南北約2.9m、東西2.5mの範囲で焼土面が確認できた。これは後でも述べるが古墳築造前の旧表土であると考えられる。焼けた土や炭化粒は古墳を築造するにあたり山に生えていた草木を焼き払った痕跡であると考えられる。焼土層は東では厚さ約2cmであるが、西側特に北西部分では厚




第２図　外護列石立面図(1)




第3図　墳丘平面図・墳丘断面図・外護列石立面図(2)

さが20cm近くあり、草木を焼き払った後にある程度平坦に均したと考えられる。

焼土層（旧表土）の上の盛土には炭化粒を含む黄褐色砂礫混じり土の層と赤褐色の焼けた砂礫層が見られるが、炭化粒が含まれていること、下層の焼土層と酷似していることから旧表土を削り取り墳丘に盛土したと考えられる。ただ現在確認できるこれらの層の一部は純粋に盛土か、流失した盛土かは区別できない。石室の石材が露出していたことでもわかるように、墳丘の盛土はかなり流失していると思われる。

**外護列石以外の石列**（第３図）

外護列石の他に、墳丘の北側から北東部分の石室と外護列石の間に長さ2.5ｍの石列が確認できた。しかし墳丘全体を巡らず一部分にしか存在しない。この石列は旧表土（焼土面）の上に築かれており、墳丘の盛土中に存在すると思われ、古墳築造の際の何らかの区画を表していることも考えられるが、一部分にしか存在しないことから性格については不明である。

**墓坑**（第12図）

ここでいう「墓坑」は石室を構築するために地下に掘り込まれた土坑のことである。

規模は南北が約６ｍ、幅は奥壁付近で2.6ｍ、開口部付近で1.5ｍの先絞りの方形を呈す。山の傾斜面を利用しているために奥壁部分では地山面から深さ約90cm、開口部ではほとんど掘り込まない南北の断面がＬ字状を呈す。奥壁部分から開口部石積みまで約10cm、排水溝先端では約20cm低く傾斜している。墓坑は旧表土（焼土層）の上から地山の岩盤を掘り込んでいる。岩盤は固く垂直に掘ることができなかったのか傾斜面を持つ。西側では段がつき、基底石を据える時転倒しないようにしているようにも見える。また基底石が置かれていた箇所は若干窪んでおり、基底石を据える基準にしたことも考えられる。（井川）

## 第２節　石　　室（第４・５・６図）

**石室の規模**

天井石は石室内に崩落し、右側壁は基底石が東方向（石室内側）に転倒し側壁全体が崩壊している。左側壁は墳丘より上に露出している部分が大きく東側にずれている。奥壁も亀裂がはいり、全体的に東方向にずれ石室内部にせり出し、石室は崩壊している。

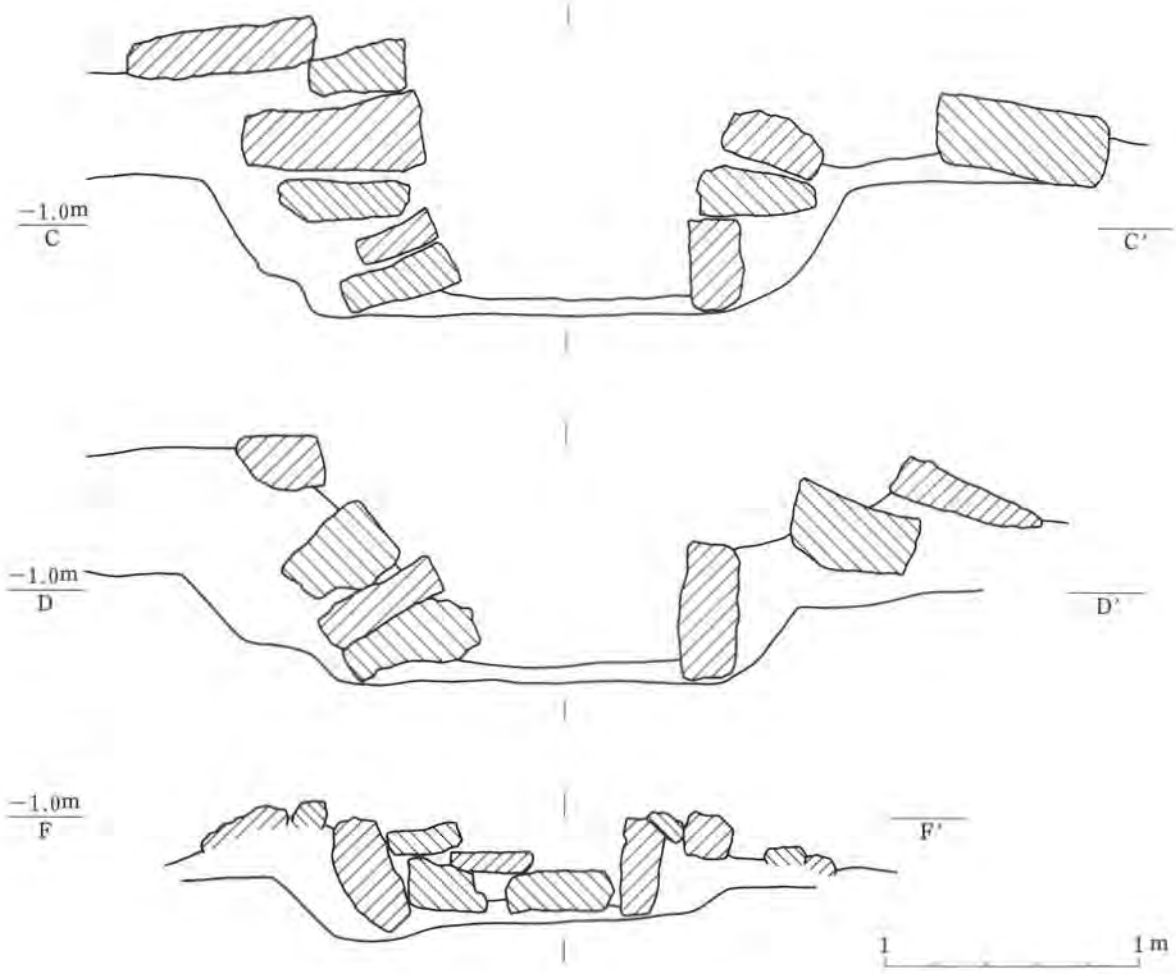
石室の規模は、奥壁から開口部石積み内側までの長さは約4.3ｍ、奥壁から側壁先端までは約５ｍ、幅は右側壁の基底石が転倒していなかった奥壁近くでは幅1.2ｍ、開口部では約0.9ｍで、途中は崩壊しているため不明である。高さも不明である。石室の平面形は左側壁の状況と右側壁の基底石が基底部は動かず石室内部に転倒したと考え、復元したラインから方形プランが推定できる。

石室の崩壊は、西から大きな力が加わり一気に崩壊したと考えられる。崩壊の仕方から人為的なものとは考えられず、地震などによる大きな力が加わり崩壊したことが考えられる。

石室内は土で埋まり、石室の石材が多く転落していた。石室内部の土を除去するにいたって、天井石３石が転落していることが確認できた。

**石室の構造**

石室の構造は、奥壁は縦約１ｍ、幅80cm、厚さ20cm、縦80cm、幅64cm、厚さ18cmの２石を墓坑に沿っ




**第4図**　石室断面図(1)

て据え、その上には厚さ15cm～20cm、幅・奥行きとも30～50cmの「長手」や「小口」といった石材を積み、隙間に小型の石材を詰めている。側壁は奥壁と同様の構造で、縦30～60cm、横55～130cm、厚さ10～20cmの基底石を墓坑に沿って据え、その上に「長手」や「小口」といった石材を積んでいる。奥壁及び側壁の基底石はいわゆる「腰石」の外観を呈する。

詳しい構築方法は後述する。

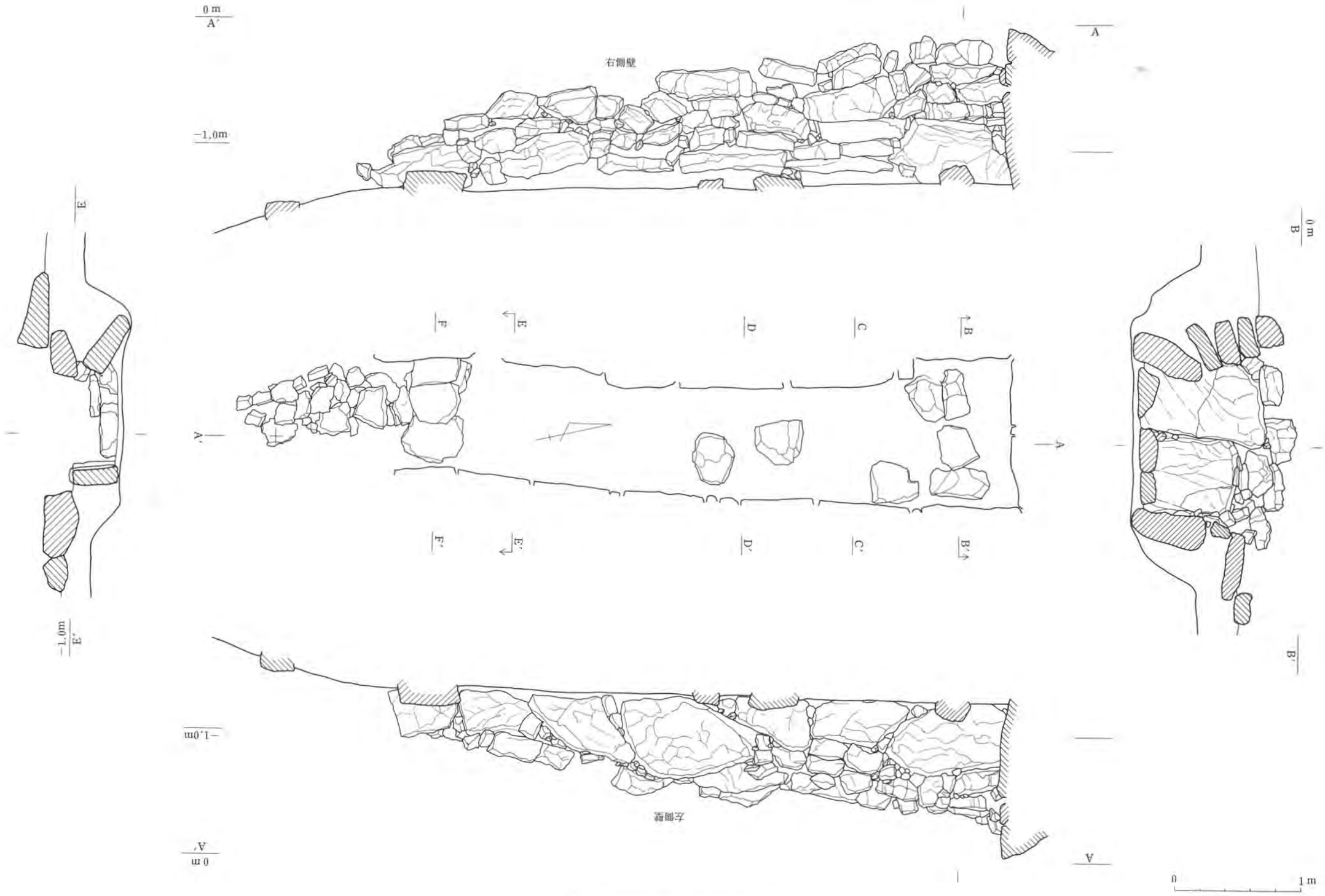
**棺台**（第6図）

石室内には側壁の石材が転落していたためこれらの石材を除き、床面直上の平坦な石7石を棺台として考えた。奥壁から約20cmのところに奥壁に平行して3石が並び、2.5mまでに4石が確認できる。棺台としたこれらの石は石室の崩壊時などに移動している可能性があるが、ほぼ原位置を保っていると考えられる。また、奥壁近くの棺台の石の間には厚さ約10cmの黄褐色の粘土が貼ってあり（第7図）、南北に約90cm、東西に約65cmの範囲で見られる。棺台部分全てに粘土が貼ってあったのかは不明である。棺台の石の配置から縦約2m、横約0.9mの棺が想定できる。（井川）

**開口部**（第6図）

開口部において2種類の石積みが認められた。ひとつは石材を積み重ねたもので、いわゆる閉塞石としてとらえる。もうひとつは扁平な板状の石材を積み上げたものである。これは閉塞石とは構造が異なるものであり、ここでは「開口部石積み」と呼称する。

調査当初、開口部石積みも含めて閉塞石と考えていた。そのため閉塞石の除去作業中に一度、開口




第5図　石室実測図・石室断面図(2)

部石積みの最下部右側壁側の１石を残して全石を外してしまった。直後の再検討により開口部石積みは閉塞石とは別の石積みと考えられるに至ったため、除去中に作成した略図と写真を参考に現場において最下部の復元を行い、他の石も含めて復元図化した。したがって、開口部石積みの位置関係は本来の場所と若干ずれが生じている可能性がある。

**閉塞石**（第６図）

石室左右両側壁の最南部の２石の間、開口部石積みに接する石室側床面から開口部石積み直上にかけて認められた。範囲は東西0.9ｍ、南北1.1ｍ。長さ10～20cm大の石材を下方に、その上方に30～40cm大の長方形主体の石材を最大３段（残高48cm）にわたって積み上げていた。閉塞石下部の石室側床面直上に須恵器（第８図13・15・16）が置かれていた。

**開口部石積み**（第６図）

閉塞石下方に見られた。床直上の東西方向に並置される最下部２石とその上の１石、さらに上方右側壁横の１石の計４石（３段、高さ34cm）が確認できた。石材は長さ30～50cm大、幅30～40cm大、厚さは上方の２石が10cm未満、最下部の２石が10～20cm大。いずれも扁平で板状の石材を用い、特に上面には平坦な面を使っている。最下部の２石の間には８～18cmの隙間があいていた。これは後述する排水溝に連続するもので、溝の一部をなす。上方の１石はこの溝の蓋石の位置に置かれていた。この溝の石室側に須恵器（14）が置かれていた。出土状況から見て、閉塞石下部から出土した須恵器と一連のもと考えられる。

**排水溝**（第６図）

開口部石積み最下部２石の間（溝）から南側の石室外へ伸びる。長さ1.4ｍ、幅10～20cm。両側に一段の石材を側壁として並べる。右側壁側６石、左側壁側４石が残る。側壁の高さ（石の厚み）は10cm前後。側壁上には蓋石が数石置かれていた。溝埋土は茶色均質の砂質シルトで水の作用により堆積したものと考えられる。排水溝上方は盛土ないし流土と考えられる茶褐色土がみられたが十分な検討は行っていない。

**開口部の築造・改修についての解釈**

閉塞石と開口部石積みは全く異なる構造のものであることから両者は時期を異にして築造されたと考えられる。このことを前提として、開口部の築造・改修について２時期に分けて推定を試みる。

〈第１期〉

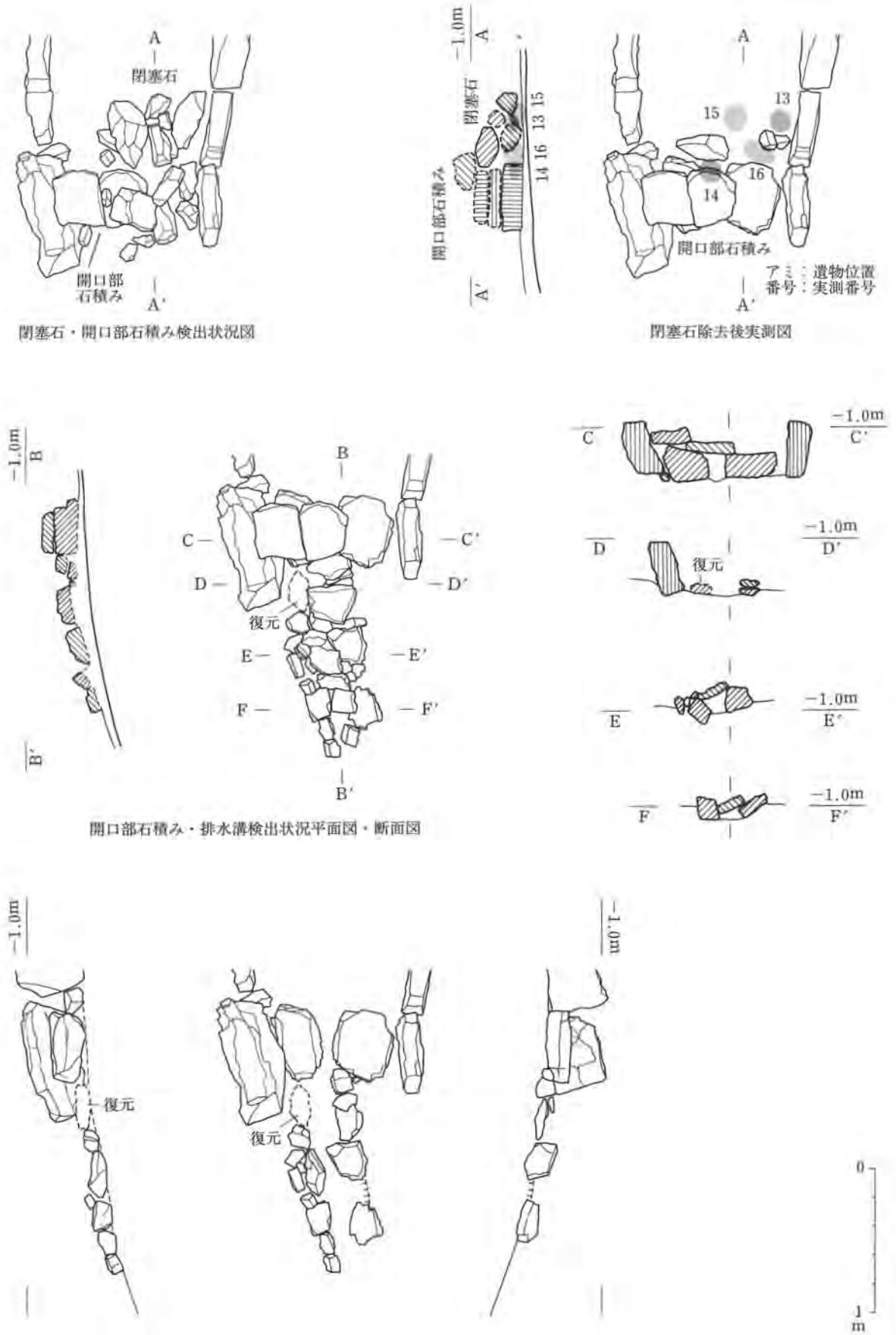
石室側壁の構築と同時に開口部石積みとそれに接続するよう排水溝が築かれる。開口部石積み最上部は現在中央～左側壁側が欠落しているように見えるが、本来は少なくともこの高さまでは石積みが存在していたと考えられる。

こうした開口部の構造は、石室側へ一段下るものであり、いわゆる「竪穴系横口式石室」との形態的・技法的関連が考えられる。

〈第２期〉

開口部の石積みの上方が一部破壊され、閉塞石を用いて閉鎖される段階。これは追葬に伴う改修であろう。この時期、閉塞石下部（床直）から開口部石積み最下部の溝部にかけて須恵器がおかれている。

（内堀）




**第6図**　開口部石積み・閉塞石・排水溝実測図

## 第３節　遺物の出土状況（第７図）

北山３号墳から出土した遺物はすべて石室内からの出土で、須恵器が16点、 土師器は破片で６点、耳環が２点、鉄製品２点がある。

石室内には炭化粒が混入した墳丘の盛土が堆積しており、これらの土を除去したところ、炭化粒が混入しない赤褐色土に達した。これがある時期の床面であると思われる。遺物はこの床面直上と赤褐色土の中から出土している。

赤褐色土の中からは須恵器の杯蓋の破片（１）、耳環２点（17・18）と鉄製品（19・20）が、床面直上からは奥壁付近で須恵器の杯蓋と杯身の２点（１・２）、右側壁の転倒した基底石の下からは須恵器の高杯３点（８～10）、蓋３点（５・６・12）、杯身１点（３）、短頸壺１点（７）と土師器片が、棺台南側では須恵器の蓋２点（４・11）、閉塞石の下からは須恵器の高杯２点（15・16）、蓋２点（13・14）が出土している。

これらの遺物は後述するようにある時期の原位置を保っていると思われる。出土状況の検討から２時期に分けられる。

〈第１期〉

棺台および棺台内の貼ってあった粘土の下の赤褐色土の中より鉄製品と須恵器の破片が出土している。須恵器の破片は奥壁部分の須恵器の杯蓋（１）と接合関係にある。また、耳環２点は鉄製品と同じ赤褐色土の中から出土していることから、奥壁付近の須恵器２点（１・２）と耳環２点（17・18）、不明鉄製品（19・20）は棺台が置かれ、粘土が貼られる前の段階に副葬されたものと考えられる。

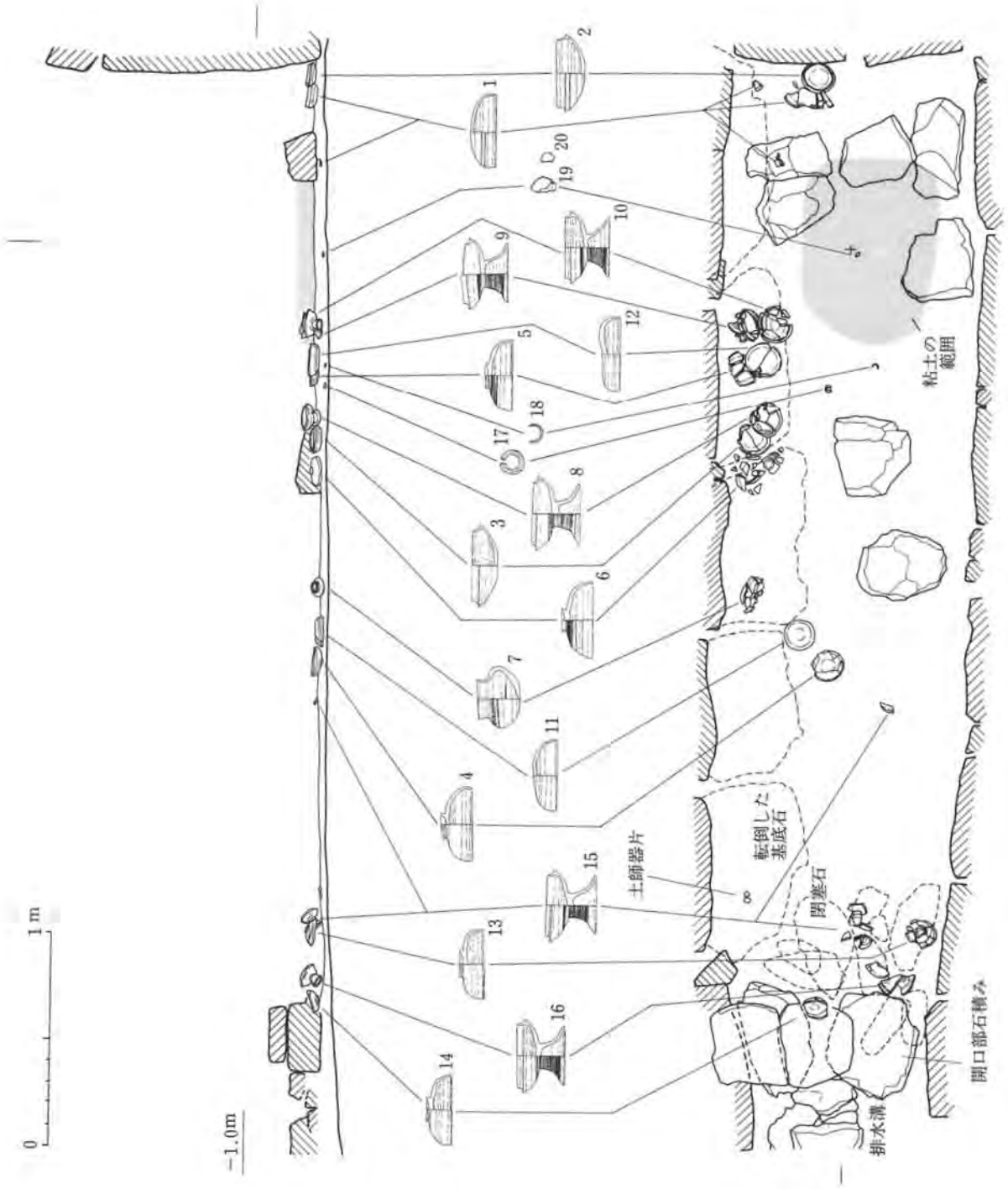
耳環の出土位置を見ると両者の間に頭一つ分の間隔があり、そこに被葬者の頭があった可能性があり、鉄製品は頭上に置かれていたと推定できる。これらは原位置を保っている可能性がある。奥壁部付近の須恵器は「片付け」よって移動させられたものと思われる。

〈第２期〉

右側壁の転倒した基底石の下から出土した須恵器（３～12）はほぼ完形になることから、ある時期の原位置を保っていると考えられる。また、棺台と推定した南端の石の開口部側にあった須恵器と共に棺台の周りに並んで置かれているように見え、棺台が設置された時に副葬された状態を留めているものと考えられる。

閉塞石の下から出土した須恵器（13～16）は片付けによって開口部に移動させられたものとも考えられるが、右側壁に沿って出土した須恵器と型式的に差はなく、棺台が設置された時期のものとしたい。閉塞する際の何らかの儀式と思われる。

前節で開口部の石積みと閉塞の状況から追葬を考えたが、遺物の出土状況からも、最低１度は追葬していることが考えられる。（井川）


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
土師器片
転倒した
基底石
閉塞石
粘土の
範囲
開口部石積み
排水溝
−1.0m
0
1m

第７図　遺物出土状況図

# 第4章　出土遺物（第8・9図）

**須恵器**

杯蓋（第8図1・4～6・11～14）

各杯蓋の法量は、1（口径13.8・器高4.7cm）、4（口径12.9cm・器高4.4cm）、5（口径13.3cm・器高4.9cm）、6（口径13.9cm・器高5.8cm）、11（口径13.3cm・器高4.5cm）、12（口径13.5cm・器高3.6cm）、13（口径21.9cm・器高4.4cm）、14（口径13.3cm・器高4.7cm）である。

1は尾張系の須恵器で器壁は薄く丁寧なつくりである。天井部は緩やかな丸みをおび、口縁部はやや内湾し、端部内面は段をなす。天井部外面には約1/2の範囲まで回転ヘラ削り調整を行う。天井部内面には木製無文当て具痕が見られる。4～6・13・14はつまみを持つタイプである。つまみはどれも径が5cm前後と幅広く扁平である。天井部内面には木製同心円当て具痕が見られる。5と6にはつまみの周縁にカキ目が施される。4と6は天井部が丸みをおび、口縁端部が内傾する。4・13・14は垂直もしくは外に開く。4にはつまみをつける際についた放射状の工具痕が見られる。11・12はつまみをもたないタイプである。天井部外面には回転ヘラ切り痕が残る。11は天井部が丸みをおびるが、12は扁平で歪みが見られる。ともに口縁端部は丸くおさまる。

杯身（第8図2・3）

各杯身の法量は、2（口径12.4cm・器高5.3cm）、3（口径12.9cm・器高4.7cm）である。

2・3ともに尾張系の須恵器である。器壁は薄く、つくりは丁寧である。2は底部の中央が平らで、丸みを持ちながら受け部に至る。口縁部はやや内傾して立ち上がり、口縁内面には段を有する。底部外面には約1/2の範囲まで回転ヘラケズリ調整を施す。底部内面には木製同心円当て具痕が見られる（写真図版7）。3は2に比べ扁平な形態である。底部外面には1/2の範囲には回転ヘラケズリを施す。口縁部は内側へ傾斜し、端部内面には段を有する。

高杯（第8図8～10・15・16）

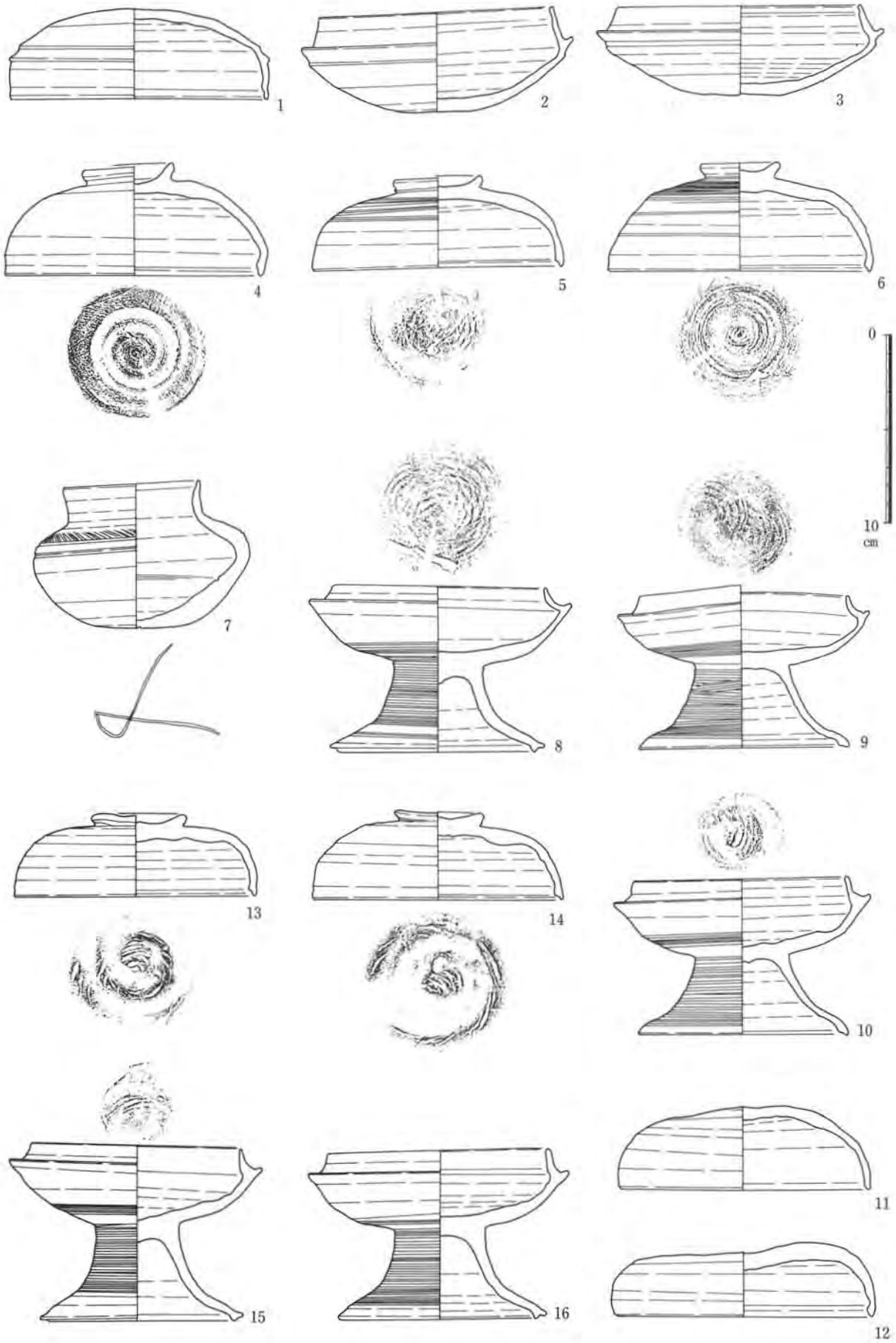
各高杯の法量は8（口径11.3cm・器高9.0cm）、9（口径13.2cm・器高8.8cm）、10（口径11.3cm・器高8.3cm）、15（口径11.2cm・器高9.4cm）、16（口径11.8cm・器高8.9cm）である。

すべて杯部の外面下半と脚部にカキ目を施す短脚の高杯である。杯部の底部内面には木製同心円当て具痕が見られる（写真図版7）。高杯は脚端部の形態で2つに分類できる。9・10は脚の内湾が強く幅広い。端部は内側をむく。8・15・16は前述のタイプに比べ脚が若干細く外反ぎみである。端部は外側をむく。しかし、杯部の形態ではほとんど差異が見られず、一時期の短脚の高杯の中のバラつきと考えるべきであろう。

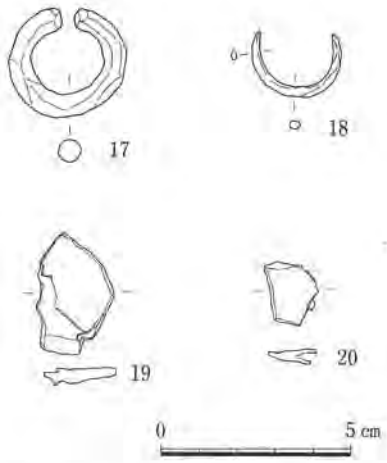
このような短脚の高杯は北山3号墳以外では、陽徳寺1号墳（関市）、西洞山5号墳（各務原市）、城之内遺跡（岐阜市）、船来山古墳群（岐阜市・糸貫町）、曽根八千町遺跡（大垣市）など中濃から西濃地域で見られる。

短頸壺（第8図7）

法量は口径が7.3cm、器高は7.9cmである。底部が平坦面をなし胴部が張り出し扁平な形態をとる。




第８図　出土遺物実測図(1)




**第９図**　出土遺物実測図(2)

底部中央から１/３の範囲に回転ヘラ削り調整が行われる。底部中央にはにはヘラ記号が見られる。胴部には沈線によって区画された範囲に斜行の文様がめぐる。胎土は密で丁寧なつくりをしている。尾張系の須恵器と思われる。

１・２以外は口縁端部や内底部、外底部に使用痕が見られる。前章第３節で検討したように、１・２の須恵器は先に副葬したもの、それ以外は追葬時のものの可能性が高い。したがって、追葬時に副葬された須恵器はそれまで使用していたものを副葬したと考えられる。

尾張系の須恵器以外の胎土には、１～２㎜の白い砂粒が多量に含まれお互いよく似ている。短脚の高杯は中濃から西濃地域に分布が見られることは述べたが、これらの遺跡から出土した短脚の高杯にも白い砂粒が含まれ酷似する。このような須恵器は東の地域では見られず、中濃から西濃にかけての地域の中で生産されていた可能性が考えられる。

尾張系の須恵器（１～３）は、渡辺編年の尾張３型式に、それ以外の須恵器は畿内４～５型式に相当すると思われ、６世紀後半の年代が与えられる。

**金属製品**　（第９図）

17・18は耳環である。17は銅芯で、断面はほぼ円形を呈す。金や銀の薄板の巻き付けや鍍金などは不明である。長径3.1㎝、短径2.9㎝、断面は径0.6㎝である。18は17に比べ薄く、軽量である。銅製品で金や銀の加飾は不明である。半円形で先端が先細りし、断面は扁平である。長径2.4㎝、断面は中央部で0.3×0.2㎝である。19・20は不明鉄製品である。

須恵器と金属製品のほかに土師器片が出土している。ハケメ調整が微かに見られるが破片のため器種は不明である。　（井川）

# 第５章　解体・図上復元（第10～18図）（第１表）

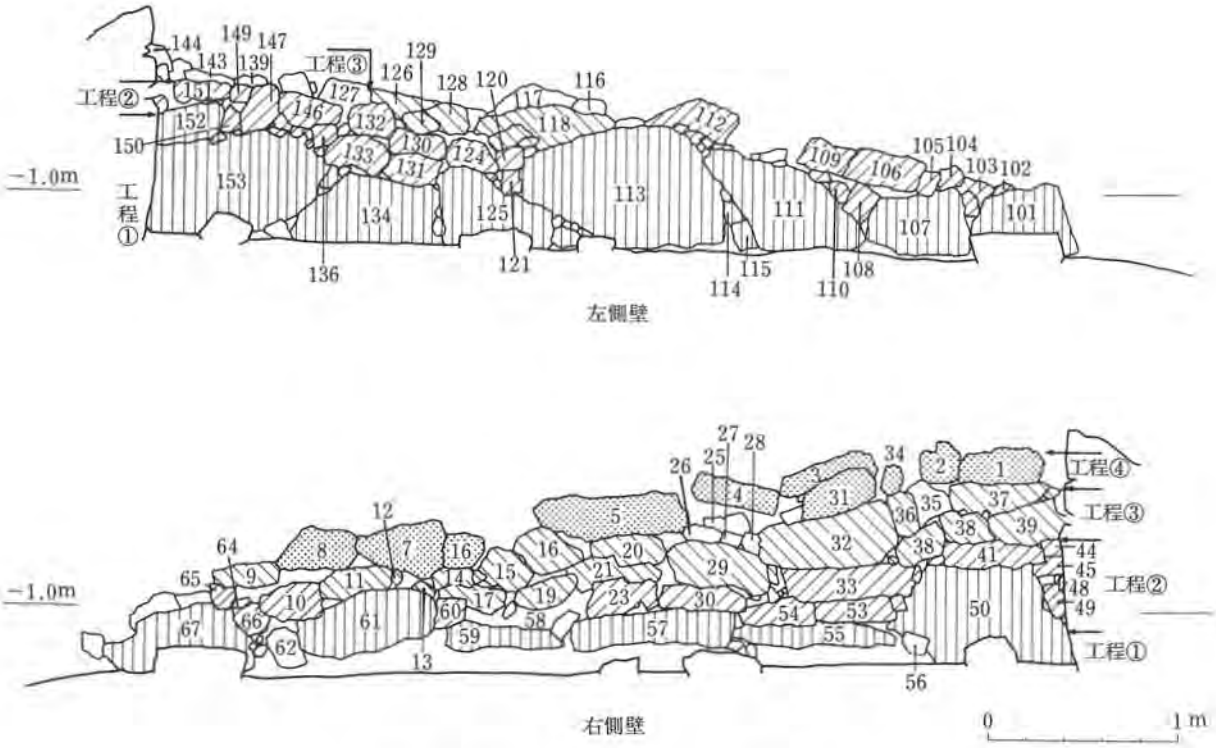
## 第１節　解体に至る経緯・方法

調査の過程で、右側壁基底石が石室内へ転倒していることとそれに伴い上部の石材が陥没している状況が確認された。左側壁の基底石はほとんど動いていないと判断されたが、上部の石材は大きく外側（東側）に移動していた。奥壁の基底石２石（209・210）にも西側から力が加わったことによると思われる横ないし斜め方向の亀裂が認められた。これらの現象は何らかの強い力（おそらくは地震）が石室に作用した結果と考えられる。

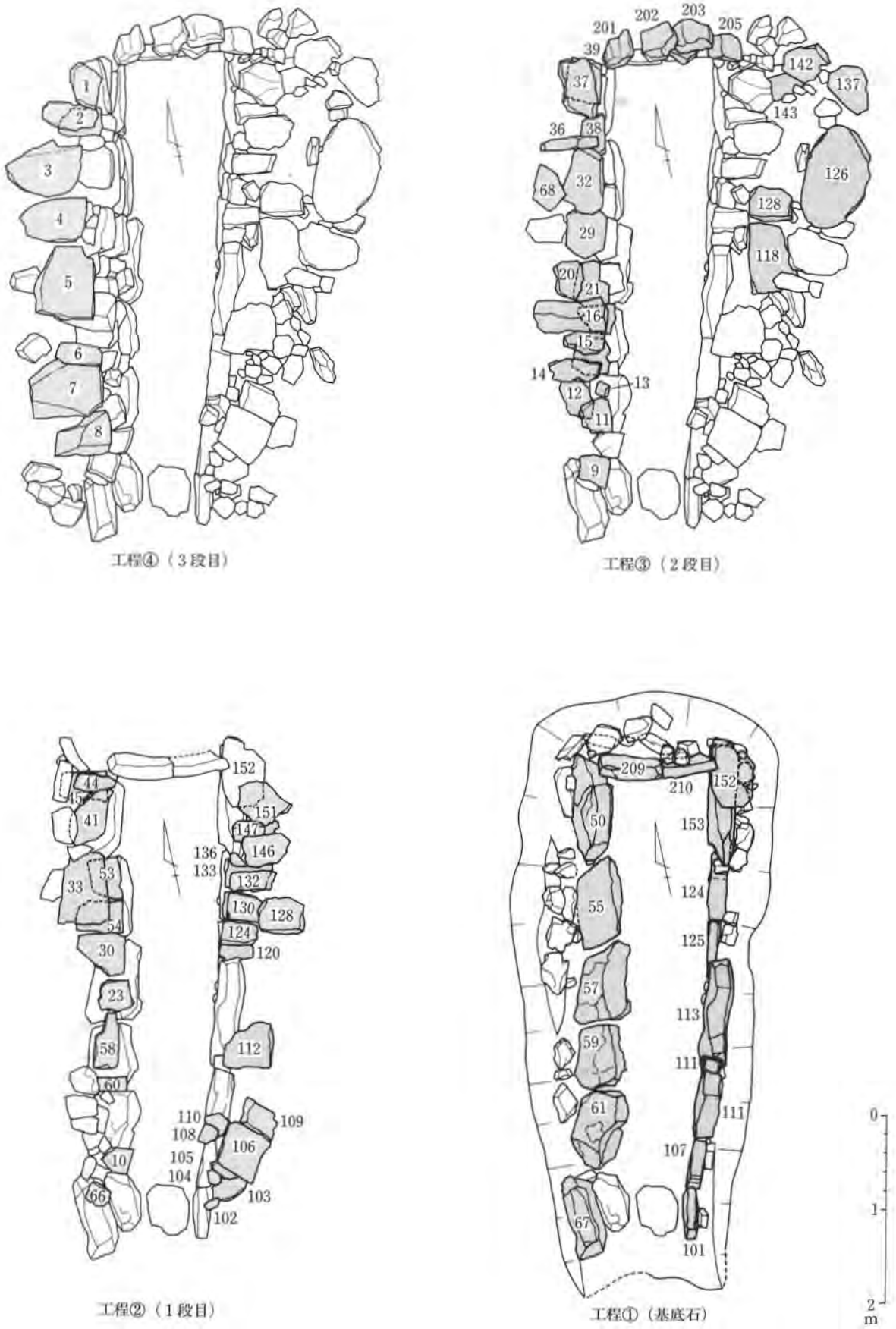
右側壁基底石転倒部下床面直上では須恵器が押しつぶされた状態で埋没しているのが外から認められ、他にも基底石転倒部の下に遺物が埋まっている可能性が高くなった。また、基底石を元に戻さないと正確な床面の形状・規模等が確認できないことも明らかであった。

そこで当初計画を変更し、基底石の復元、除去までを含む石室の解体調査を新たに加えた。解体の方法は、石材全てに番号を付け、検出平面図・レベル・写真等の記録を作成後除去し、基底石検出までを行った。同時に墓坑も掘り下げた。基底石検出状況の記録作成後、転倒した右側壁基底石を復元（立ち上げ）し、復元状態を記録した。

右側壁基底石転倒部下では８個体の須恵器が見つかった。須恵器は出土状態の記録作成後取り上げ、その後基底石（左右側壁・奥壁）を墓坑から除去した。除去した石材については、１石毎に平面図・立面図（石室内から見た状態）・側面図（開口部から見た状態）を作成した。




**第10図**　石室解体過程立面図（復元工程順）




**第11図**　石室解体過程平面図（復元工程順）

## 第2節　石　　材（第13～17図）（第１表）

１石毎に作成した実測図（第15～17図）に基づき、石材の短辺・長辺・厚さの寸法及び積み方（小口・長手・平）を記載した一覧表（第１表）を作成した。一覧表に基づき石材の規格性を検討するため、短辺・長辺・厚さ各々に関するヒストグラムを作成した（第13図上）。結果、厚さについては強い規格性（10～25cm中心）が認められた。短辺・長辺についても、一定の規格性が認められた（短辺25～40cm中心、長辺35～50cm中心）。ただし、長辺には75～80cmにもピークが認められ、105cm以上の大形のものも一定量認められる。次に、厚さが均一に近いことを前提としてどのくらいの種類の石材選択しているのかを検討するため、縦軸に長辺／短辺、横軸に体積（短辺×長辺×厚さ）をとったグラフを作成した。同時に石材の種類（平（＝基底石）・小口・長手・詰）も表示した（第13図下）。結果、Ⅰ～Ⅶ群の７つの群に分かれることが看取された。そこで、各群毎に石材の種類をヒストグラムで表示した（第14図左）。第13図下、第14図左からみて石材の選択性について以下のようにまとめることができる。小形のもの（Ⅰ群）は詰専用、中形（Ⅱ・Ⅲ群）では、長辺の長いもの（Ⅱ群）は主に小口で一部詰、比較的短いもの（Ⅲ群）では小口を主としつつも長手にも使用する。大形の石材（Ⅳ～Ⅶ群）は主に平（基底石）と長手に使用し、Ⅳ・Ⅴ群では加えて小口にも用いる。第14図右は石材の種類毎にⅠ～Ⅶ各群の比率を作成したもので詰→小口→長手→平の順に大形の石材を使用する頻度が高くなる状況が認められる。

## 第3節　図上復元（第12図）

**基底石**

右側壁を現場で復元した基底石実測図を第12図に示す。墓坑の壁に沿って薄い板状の石材を壁状に立て並べている。立石の下部や立石間には場所によっては詰石が見られる。石材のかみ合わせの状態から後述するように立石順序が推定できた（後述）。

**側壁**

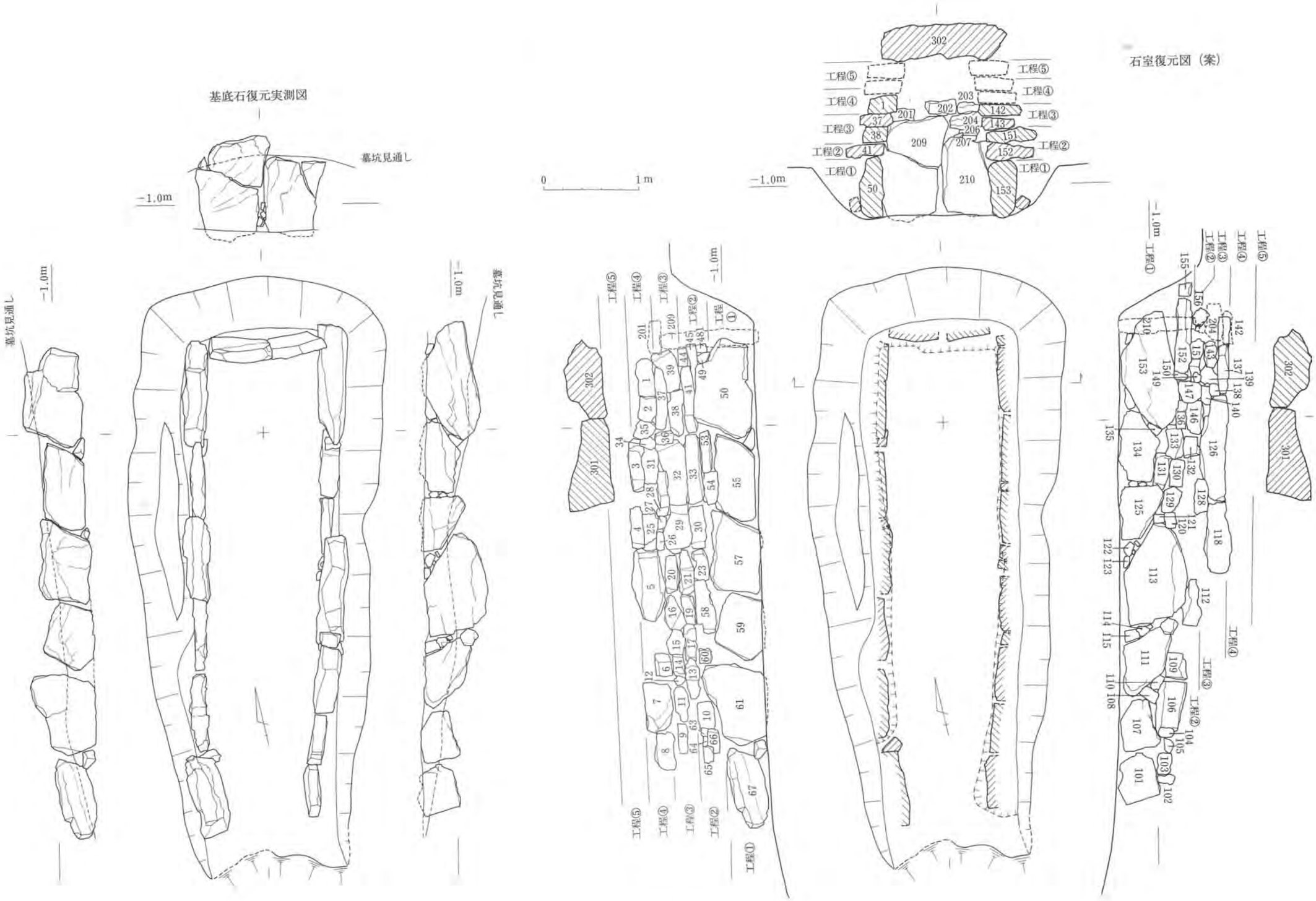
左右の側壁について、発掘時の記録（写真・立面図）と１石毎の実測図、右側壁については基底石の復元立面図を用いて、側壁崩壊前の状態を図上で復元した。復元には不確実な部分も多く、他の積み方が考えられる場合もあるが、現時点での試案として提示したい。

なお、用いる石材の形状は基底石が平（立石）のみであるのに対し、その上に積む石材は小口や長手のものばかりであった。

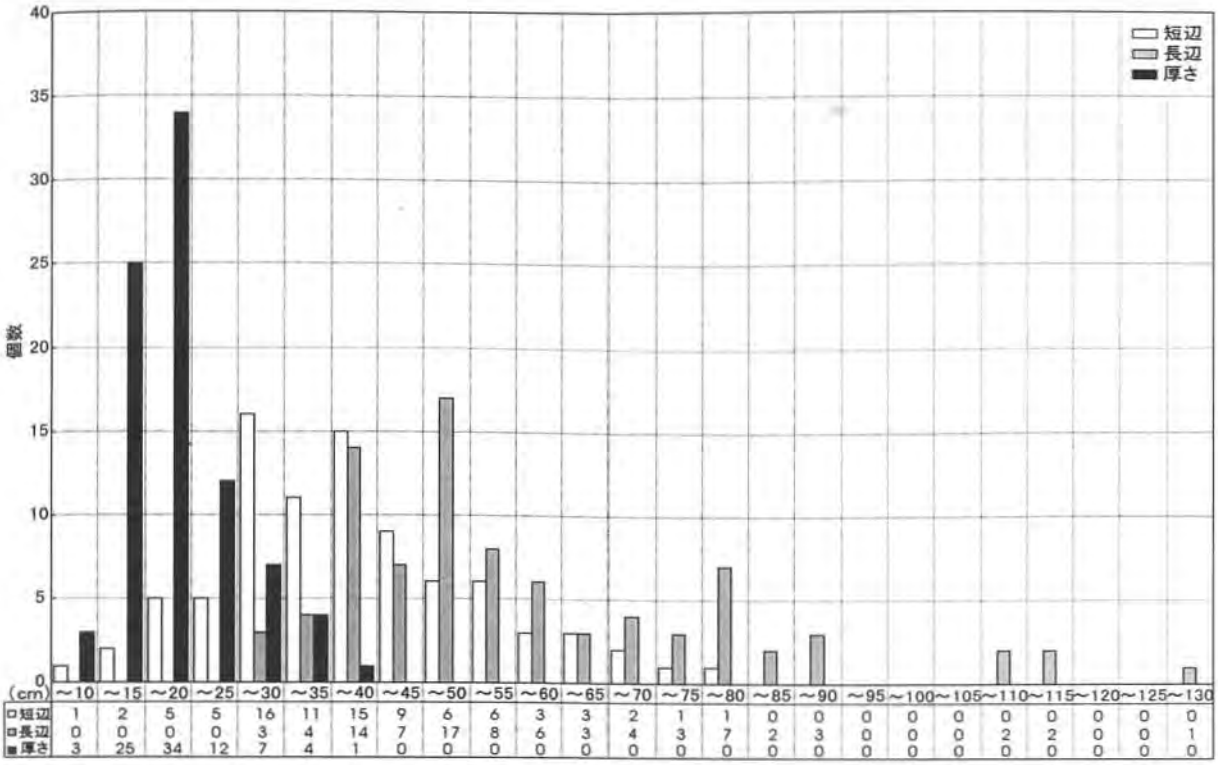
**右側壁**

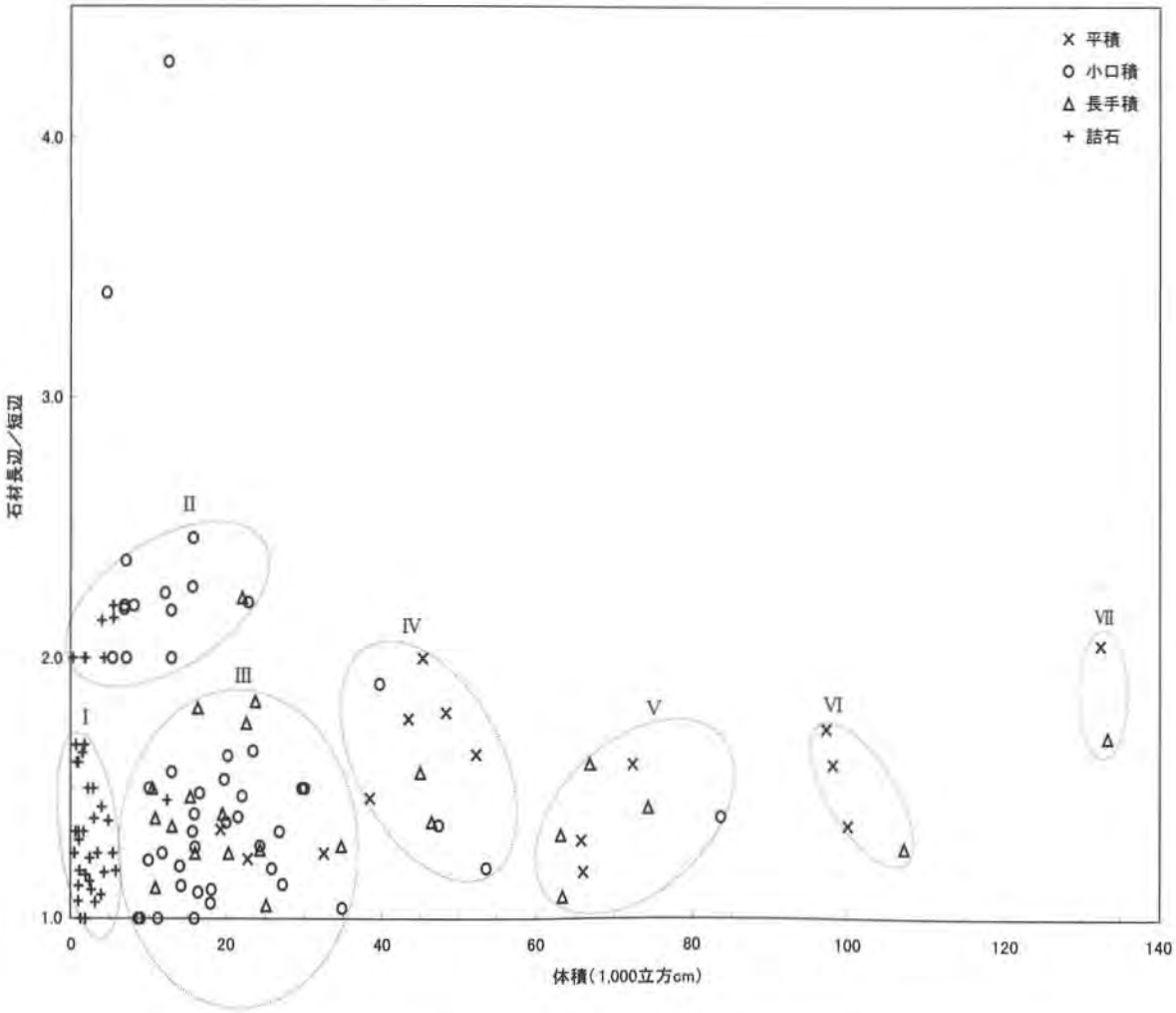
基底石（55・57・59・61）は完全に転倒し、奥壁に接する基底石（50）は斜めに傾いた状態であった。

基底石の上に乗る石材は位置関係をおおよそ保ったまま基底石の転倒に伴い下へずれたものと考えられ、上下関係はある程度推定可能である。左右の平行関係については、基底石の倒れ方が一定でないため、基底石の上端を基準に平行関係を推定した。59の上部については、石材の抜け落ちている部分が明らかに認められ（床面に散在）、復元は一つの可能性を示すにすぎない。こうした制約の中で石

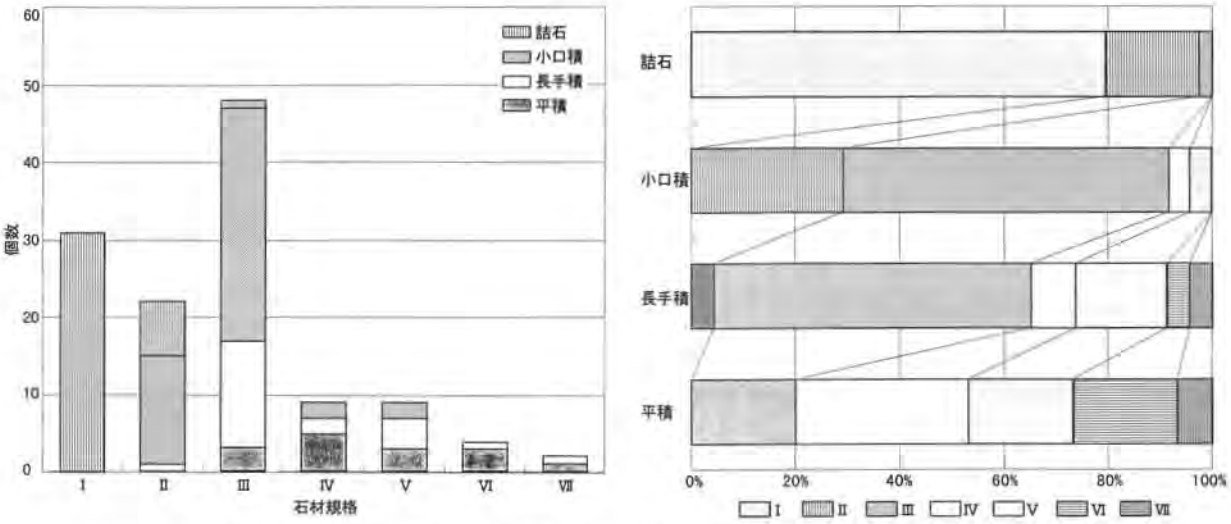



第12図　基底石復元実測図・石室復元図（案）




第13図　石材各辺のヒストグラム（上）・石材選択傾向（規格）グラフ（下）




**第14図**　各群毎の石材種類の比率（左）・石材種類毎の各群比率（右）

の上下関係や左右の平行関係を考慮しつつ復元したのが、第12図である。この図から、側壁構築に関する工程が推定できる。工程①：基底石を奥壁よりの50から順に開口部側に向かって立て並べる。工程②：61の上端（基底石で一番高い）を目安に石材を１～２段目地をそろえて積んでいく。工程③：工程②で積んだ石材の上面を基礎に厚いもの（29・30）は１石、薄いものは２石石材を目地をそろえて積む。工程④：工程③で積んだ石材の上面を基礎に工程③と同様の積み方（厚い石材５・７）を繰り返す。③と④の工程では厚い石と薄い石を用いているが、厚いものは薄いもののほぼ２石分に相当する。工程⑤：解体作業の段階ではこの工程に該当する石材はすでに除去されていたが、発掘初期の写真を見ると工程④の石材７・８の上にのる石材が認められる。また、石室内にも多数の側壁と考えられる転落石が認められたことから、工程④の後にもう１工程程度側壁が築かれたものと推定する。工程⑥：天井石301・302を架構する。

**左側壁**

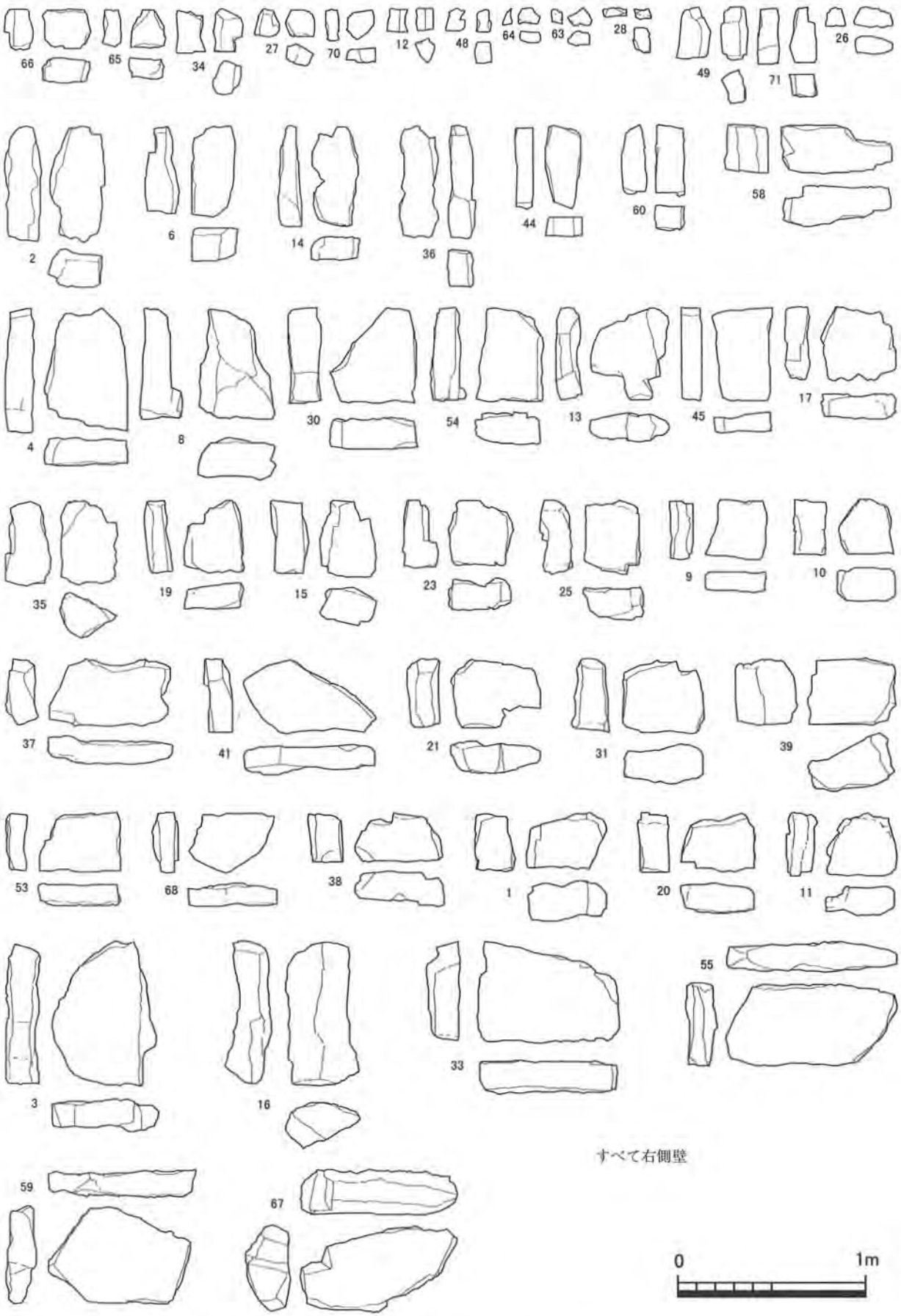
基底石はほぼ現位置を保っていると考えられるのに対し、上部の石材は大きく水平方向に東へずれたものも見られ、上に行くほど復元は困難であったが、右側壁を参考に復元した。側壁構築工程は以下のように推定できる。工程①：基底石を125･134を出発点として、奥壁よりに153、開口部よりに125から順に開口部に向かって立て並べる。最初の工程では、基本的に基底石のみを立て並べていると考えられるが、153の上にのる152を積まないと奥壁の基底石210は立てられないと考えられる。したがって、この工程で153の上の152も同時に積んでいる可能性が高い。工程②：基底石の上に石材を２～３段目地をそろえて積む。工程③：工程②で積んだ石材の上面を基礎に、厚いもの（118･126）は１石、薄いものは２石石材を目地をそろえて積む。工程③の後、右側壁から推定するとさらに２工程ほど側壁を積んだものと考えられるが残りが悪く確認できなかった。

両側壁の積み方を検討すると、工程①②③ともに共通した積み方を示す。工程単位の高さも25～30cmで共通するが、工程間のレベルには半工程ほどの高さのズレが見られる。このズレは残りの悪かった左側壁の工程復元に原因があるのかもしれない。ともあれ、奥壁も含めこれらの側壁は一連の工程で構築された可能性が高い。

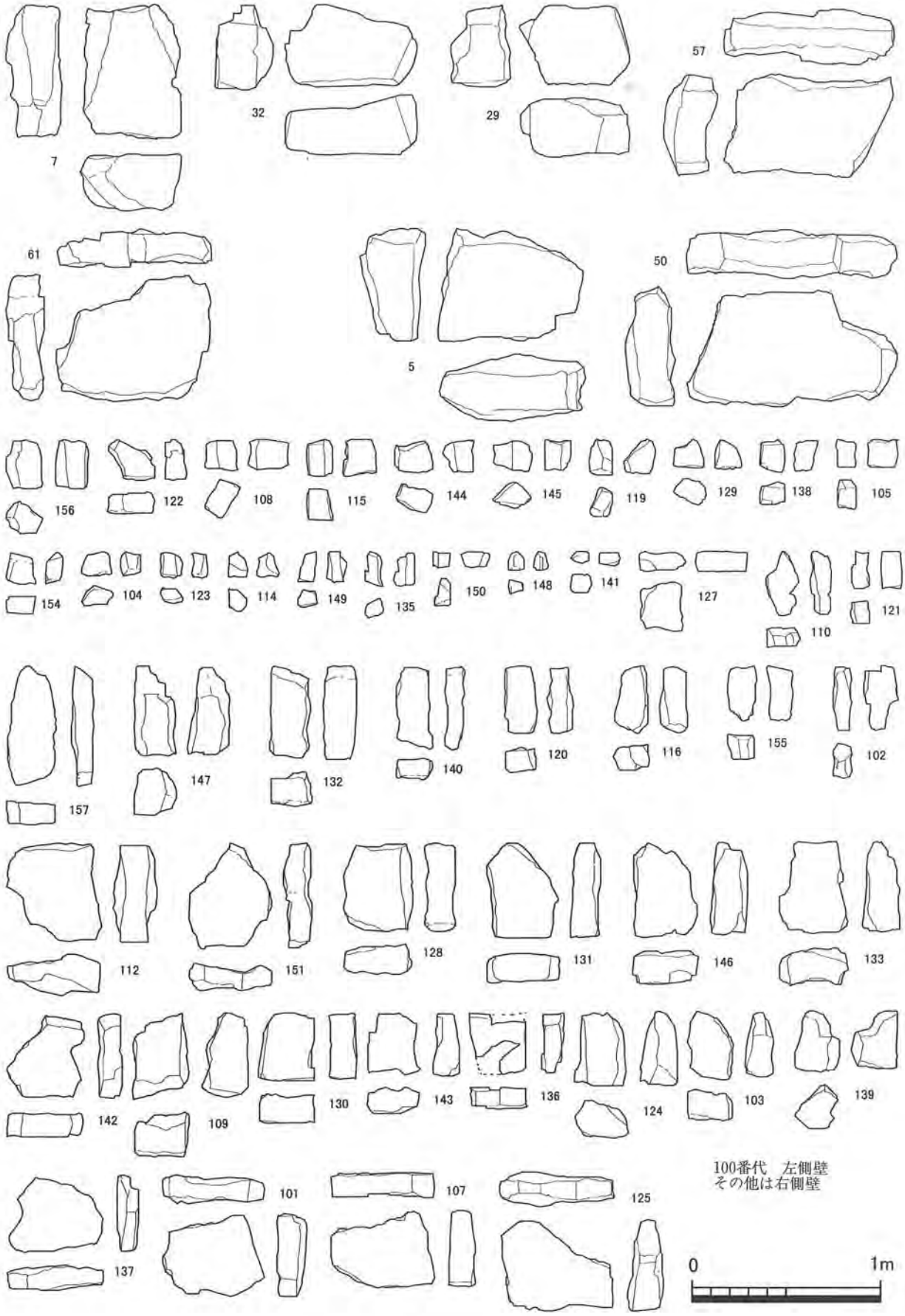
**工程復元に基づく解体過程**（第10・11図）

側壁工程復元に基づいて、石室解体過程（石材除去過程）を工程毎に平面図と立面図で示す。平面図（第11図）を見ると、基底石が転倒した右側壁（左側）では各工程の石材が基底石の上に乗っていることがわかる。左側壁（右側）では基底石及び工程②の石材はほぼ現位置を保つのに対し、それより上では大きく右側へずれている。

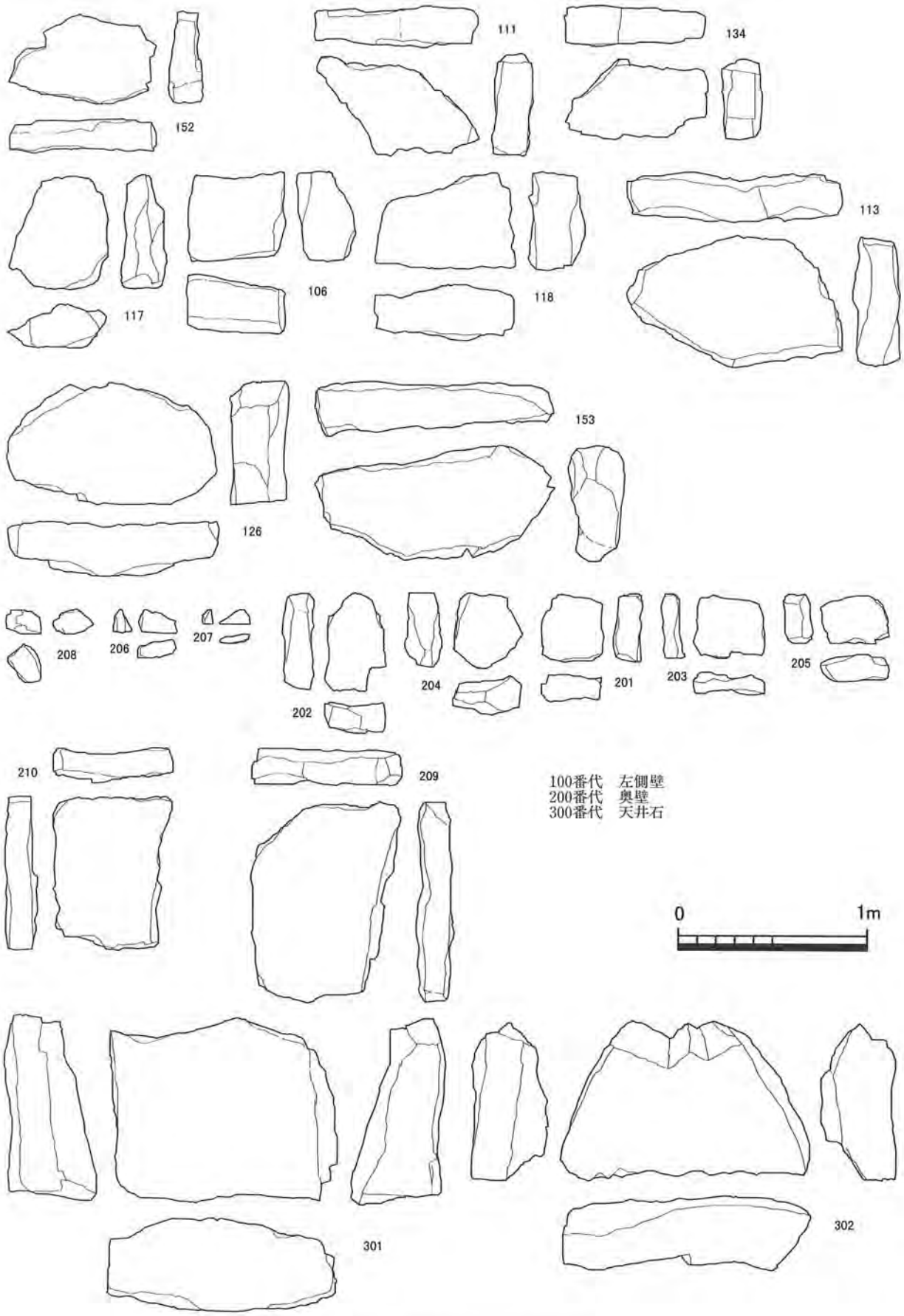
次に立面図（第10図）を検討する。左側壁立面図では工程③以降の残りが非常に悪いことがわかる。右側壁立面図では、側壁の残りが良好で、各工程が認められるが、基底石50と55の間と工程④の１と２を結ぶ線を境に大きな工程のずれが見られるなど基底石転倒に伴う変形も認められる。　（内堀）




**第15図**　石室使用石材実測図(1)




第16図　石室使用石材実測図(2)




**第17図**　石室使用石材実測図(3)

## 第1表　石室使用石材一覧

| 番号 | 壁 | 積方 | サイズ(cm) | | | 体積(立方cm) | 重量(kg) | 石材規格 | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 縦 | 横 | 控 | | | 長辺(cm) | 短辺(cm) | 長辺／短辺 | 厚さ(cm) | 規格 |
| 1 | 右 | 長手 | 22 | 42 | 30 | 19,494 | 49.9 | 42 | 30 | 1.40 | 22 | Ⅲ |
| 2 | 右 | 小口 | 20 | 28 | 62 | 22,800 | 58.4 | 62 | 28 | 2.21 | 20 | Ⅱ |
| 3 | 右 | 小口 | 18 | 56 | 76 | 47,355 | 121.2 | 76 | 56 | 1.36 | 18 | Ⅳ |
| 4 | 右 | 小口 | 14 | 44 | 66 | 30,044 | 76.9 | 66 | 44 | 1.50 | 14 | Ⅲ |
| 5 | 右 | 長手 | 36 | 76 | 60 | 107,250 | 274.6 | 76 | 60 | 1.27 | 36 | Ⅵ |
| 6 | 右 | 小口 | 18 | 24 | 48 | 12,936 | 33.1 | 48 | 24 | 2.00 | 16 | Ⅱ |
| 7 | 右 | 小口 | 30 | 52 | 72 | 83,616 | 214.1 | 72 | 52 | 1.38 | 30 | Ⅴ |
| 8 | 右 | 小口 | 22 | 40 | 60 | 29,700 | 76.0 | 60 | 40 | 1.50 | 22 | Ⅲ |
| 9 | 右 | 小口 | 12 | 32 | 32 | 8,680 | 22.2 | 32 | 32 | 1.00 | 12 | Ⅲ |
| 10 | 右 | 小口 | 18 | 30 | 30 | 11,200 | 28.7 | 30 | 30 | 1.00 | 18 | Ⅲ |
| 11 | 右 | 長手 | 16 | 46 | 34 | 13,020 | 33.3 | 46 | 34 | 1.35 | 16 | Ⅲ |
| 12 | 右 | 詰 | 10 | 12 | 12 | 1,300 | 3.3 | 12 | 12 | 1.00 | 10 | Ⅰ |
| 13 | 右 | 小口 | 14 | 42 | 50 | 25,800 | 66.0 | 50 | 42 | 1.19 | 14 | Ⅲ |
| 14 | 右 | 小口 | 12 | 24 | 54 | 12,144 | 31.1 | 54 | 24 | 2.25 | 12 | Ⅱ |
| 15 | 右 | 小口 | 20 | 30 | 42 | 15,912 | 40.7 | 42 | 30 | 1.40 | 20 | Ⅲ |
| 16 | 右 | 小口 | 24 | 40 | 76 | 39,712 | 101.7 | 76 | 40 | 1.90 | 24 | Ⅳ |
| 17 | 右 | 小口 | 12 | 40 | 40 | 15,912 | 40.7 | 40 | 40 | 1.00 | 12 | Ⅲ |
| 19 | 右 | 小口 | 14 | 32 | 40 | 11,760 | 30.1 | 40 | 32 | 1.25 | 14 | Ⅲ |
| 20 | 右 | 長手 | 16 | 40 | 32 | 15,984 | 40.9 | 40 | 32 | 1.25 | 16 | Ⅲ |
| 21 | 右 | 長手 | 18 | 48 | 38 | 24,300 | 62.2 | 48 | 38 | 1.26 | 18 | Ⅲ |
| 23 | 右 | 小口 | 18 | 34 | 36 | 17,952 | 46.0 | 36 | 34 | 1.06 | 18 | Ⅲ |
| 25 | 右 | 小口 | 18 | 30 | 40 | 15,660 | 40.1 | 40 | 30 | 1.33 | 18 | Ⅲ |
| 26 | 右 | 詰 | 10 | 20 | 10 | 1,800 | 4.6 | 20 | 10 | 2.00 | 10 | Ⅱ |
| 27 | 右 | 詰 | 14 | 12 | 14 | 1,960 | 5.0 | 14 | 12 | 1.17 | 14 | Ⅰ |
| 28 | 右 | 詰 | 14 | 8 | 5 | 780 | 2.0 | 8 | 5 | 1.60 | 14 | Ⅰ |
| 29 | 右 | 長手 | 32 | 58 | 44 | 63,210 | 161.8 | 58 | 44 | 1.32 | 32 | Ⅴ |
| 30 | 右 | 小口 | 17 | 46 | 52 | 27,200 | 69.6 | 52 | 46 | 1.13 | 17 | Ⅲ |
| 31 | 右 | 長手 | 20 | 42 | 40 | 25,092 | 64.2 | 42 | 40 | 1.05 | 20 | Ⅲ |
| 32 | 右 | 長手 | 32 | 70 | 44 | 66,906 | 171.3 | 70 | 44 | 1.59 | 32 | Ⅴ |
| 33 | 右 | 長手 | 18 | 74 | 54 | 46,440 | 118.9 | 74 | 54 | 1.37 | 18 | Ⅳ |
| 34 | 右 | 詰 | 18 | 16 | 22 | 4,845 | 12.4 | 22 | 16 | 1.38 | 18 | Ⅰ |
| 35 | 右 | 小口 | 24 | 30 | 46 | 19,720 | 50.5 | 46 | 30 | 1.53 | 24 | Ⅲ |
| 36 | 右 | 小口 | 20 | 14 | 60 | 12,540 | 32.1 | 60 | 14 | 4.29 | 20 | Ⅱ |
| 37 | 右 | 長手 | 16 | 66 | 36 | 23,664 | 60.6 | 66 | 36 | 1.83 | 16 | Ⅲ |
| 38 | 右 | 長手 | 18 | 47 | 26 | 16,320 | 41.8 | 47 | 26 | 1.81 | 18 | Ⅲ |
| 39 | 右 | 長手 | 32 | 46 | 36 | 34,776 | 89.0 | 46 | 36 | 1.28 | 32 | Ⅲ |
| 41 | 右 | 長手 | 16 | 70 | 40 | 22,560 | 57.8 | 70 | 40 | 1.75 | 16 | Ⅲ |
| 44 | 右 | 小口 | 10 | 20 | 44 | 6,930 | 17.7 | 44 | 20 | 2.20 | 10 | Ⅱ |
| 45 | 右 | 小口 | 10 | 32 | 50 | 12,960 | 33.2 | 50 | 32 | 1.56 | 10 | Ⅲ |
| 48 | 右 | 詰 | 12 | 9 | 12 | 1,056 | 2.7 | 12 | 9 | 1.33 | 12 | Ⅰ |
| 49 | 右 | 詰 | 18 | 13 | 28 | 5,508 | 14.1 | 28 | 13 | 2.15 | 18 | Ⅱ |
| 50 | 右 | 平 | 64 | 110 | 27 | 97,200 | 248.8 | 110 | 64 | 1.72 | 27 | Ⅵ |
| 53 | 右 | 長手 | 12 | 44 | 30 | 15,360 | 39.3 | 44 | 30 | 1.47 | 12 | Ⅲ |
| 54 | 右 | 小口 | 18 | 36 | 50 | 21,504 | 55.1 | 50 | 36 | 1.39 | 18 | Ⅲ |
| 55 | 右 | 平 | 45 | 90 | 16 | 45,276 | 115.9 | 90 | 45 | 2.00 | 16 | Ⅳ |
| 57 | 右 | 平 | 56 | 89 | 30 | 72,270 | 185.0 | 89 | 56 | 1.59 | 30 | Ⅴ |
| 58 | 右 | 長手 | 22 | 58 | 26 | 22,050 | 56.4 | 58 | 26 | 2.23 | 22 | Ⅱ |
| 59 | 右 | 平 | 52 | 76 | 15 | 38,454 | 98.4 | 76 | 52 | 1.46 | 15 | Ⅳ |
| 60 | 右 | 小口 | 13 | 16 | 38 | 7,104 | 18.2 | 38 | 16 | 2.38 | 13 | Ⅱ |
| 61 | 右 | 平 | 68 | 80 | 20 | 66,096 | 169.2 | 80 | 68 | 1.18 | 20 | Ⅴ |
| 63 | 右 | 詰 | 7 | 12 | 9 | 637 | 1.6 | 12 | 9 | 1.33 | 7 | Ⅰ |
| 64 | 右 | 詰 | 6 | 10 | 8 | 504 | 1.3 | 10 | 8 | 1.25 | 6 | Ⅰ |
| 65 | 右 | 詰 | 10 | 18 | 20 | 2,700 | 6.9 | 20 | 18 | 1.11 | 10 | Ⅰ |
| 66 | 右 | 詰 | 14 | 26 | 22 | 5,796 | 14.8 | 26 | 22 | 1.18 | 14 | Ⅰ |
| 67 | 右 | 平 | 47 | 83 | 25 | 43,452 | 111.2 | 83 | 47 | 1.77 | 25 | Ⅳ |
| 68 | 右 | 長手 | 12 | 48 | 32 | 10,500 | 26.9 | 48 | 32 | 1.50 | 12 | Ⅲ |
| 70 | 右 | 詰 | 7 | 15 | 16 | 1,008 | 2.6 | 16 | 15 | 1.07 | 7 | Ⅰ |
| 71 | 右 | 詰 | 12 | 14 | 30 | 4,004 | 10.3 | 30 | 14 | 2.14 | 12 | Ⅱ |
| 101 | 左 | 平 | 44 | 54 | 15 | 22,750 | 58.2 | 54 | 44 | 1.23 | 15 | Ⅲ |
| 102 | 左 | 小口 | 18 | 10 | 34 | 4,624 | 11.8 | 34 | 10 | 3.40 | 18 | Ⅱ |
| 103 | 左 | 小口 | 16 | 24 | 36 | 10,080 | 25.8 | 36 | 24 | 1.50 | 16 | Ⅲ |
| 104 | 左 | 詰 | 10 | 16 | 12 | 1,680 | 4.3 | 16 | 12 | 1.33 | 10 | Ⅰ |
| 105 | 左 | 詰 | 16 | 10 | 15 | 2,250 | 5.8 | 15 | 10 | 1.50 | 16 | Ⅰ |
| 106 | 左 | 長手 | 32 | 52 | 48 | 63,450 | 162.4 | 52 | 48 | 1.08 | 32 | Ⅴ |
| 107 | 左 | 平 | 41 | 55 | 14 | 19,239 | 49.3 | 55 | 41 | 1.34 | 14 | Ⅲ |
| 108 | 左 | 詰 | 21 | 17 | 16 | 3,168 | 8.1 | 17 | 16 | 1.06 | 21 | Ⅰ |
| 109 | 左 | 小口 | 24 | 28 | 46 | 23,408 | 59.9 | 46 | 28 | 1.64 | 24 | Ⅲ |
| 110 | 左 | 詰 | 10 | 17 | 34 | 4,340 | 11.1 | 34 | 17 | 2.00 | 10 | Ⅱ |
| 111 | 左 | 平 | 54 | 88 | 22 | 52,193 | 133.6 | 88 | 54 | 1.63 | 22 | Ⅳ |
| 112 | 左 | 小口 | 24 | 50 | 52 | 34,884 | 89.3 | 52 | 50 | 1.04 | 24 | Ⅲ |
| 113 | 左 | 平 | 72 | 114 | 26 | 98,056 | 251.0 | 114 | 72 | 1.58 | 26 | Ⅵ |
| 114 | 左 | 詰 | 12 | 10 | 13 | 1,100 | 2.8 | 13 | 10 | 1.30 | 12 | Ⅰ |
| 115 | 左 | 詰 | 18 | 14 | 20 | 3,978 | 10.2 | 20 | 14 | 1.43 | 18 | Ⅰ |
| 116 | 左 | 小口 | 14 | 18 | 36 | 7,168 | 18.4 | 36 | 18 | 2.00 | 14 | Ⅱ |
| 117 | 左 | 小口 | 24 | 52 | 62 | 53,508 | 137.0 | 62 | 52 | 1.19 | 24 | Ⅴ |
| 118 | 左 | 長手 | 30 | 74 | 52 | 74,250 | 190.1 | 74 | 52 | 1.42 | 30 | Ⅴ |
| 119 | 左 | 詰 | 16 | 12 | 18 | 2,926 | 7.5 | 18 | 12 | 1.50 | 16 | Ⅰ |
| 120 | 左 | 小口 | 12 | 16 | 35 | 6,912 | 17.7 | 35 | 16 | 2.19 | 12 | Ⅱ |
| 121 | 左 | 詰 | 12 | 10 | 20 | 1,920 | 4.9 | 20 | 10 | 2.00 | 12 | Ⅱ |
| 122 | 左 | 詰 | 11 | 24 | 22 | 3,927 | 10.1 | 24 | 22 | 1.09 | 11 | Ⅰ |
| 123 | 左 | 詰 | 8 | 11 | 13 | 1,152 | 2.9 | 13 | 11 | 1.18 | 8 | Ⅰ |
| 124 | 左 | 小口 | 20 | 27 | 40 | 16,560 | 42.4 | 40 | 27 | 1.48 | 20 | Ⅲ |
| 125 | 左 | 平 | 48 | 60 | 18 | 32,490 | 83.2 | 60 | 48 | 1.25 | 18 | Ⅲ |
| 126 | 左 | 長手 | 30 | 112 | 66 | 133,375 | 341.4 | 112 | 66 | 1.70 | 30 | Ⅶ |
| 127 | 左 | 詰 | 26 | 22 | 10 | 5,500 | 14.1 | 22 | 10 | 2.20 | 26 | Ⅱ |
| 128 | 左 | 小口 | 16 | 36 | 46 | 24,288 | 62.2 | 46 | 36 | 1.28 | 16 | Ⅲ |
| 129 | 左 | 詰 | 14 | 16 | 14 | 2,448 | 6.3 | 16 | 14 | 1.14 | 14 | Ⅰ |
| 130 | 左 | 小口 | 14 | 30 | 36 | 14,040 | 35.9 | 36 | 30 | 1.20 | 14 | Ⅲ |
| 131 | 左 | 小口 | 16 | 38 | 52 | 19,964 | 51.1 | 52 | 38 | 1.37 | 16 | Ⅲ |
| 132 | 左 | 小口 | 18 | 22 | 50 | 15,640 | 40.0 | 50 | 22 | 2.27 | 18 | Ⅱ |
| 133 | 左 | 小口 | 20 | 36 | 48 | 26,784 | 68.6 | 48 | 36 | 1.33 | 20 | Ⅲ |
| 134 | 左 | 平 | 43 | 77 | 22 | 48,280 | 123.6 | 77 | 43 | 1.79 | 22 | Ⅳ |
| 135 | 左 | 詰 | 11 | 11 | 18 | 1,540 | 3.9 | 18 | 11 | 1.64 | 11 | Ⅰ |
| 136 | 左 | 小口 | 12 | 30 | 30 | 8,960 | 22.9 | 30 | 30 | 1.00 | 12 | Ⅲ |
| 137 | 左 | 長手 | 12 | 50 | 40 | 20,280 | 51.9 | 50 | 40 | 1.25 | 12 | Ⅲ |
| 138 | 左 | 詰 | 12 | 13 | 16 | 2,496 | 6.4 | 16 | 13 | 1.23 | 12 | Ⅰ |
| 139 | 左 | 詰 | 24 | 22 | 32 | 12,369 | 31.7 | 32 | 22 | 1.45 | 24 | Ⅲ |
| 140 | 左 | 小口 | 10 | 20 | 44 | 8,118 | 20.8 | 44 | 20 | 2.20 | 10 | Ⅱ |
| 141 | 左 | 詰 | 10 | 10 | 6 | 693 | 1.8 | 10 | 6 | 1.67 | 10 | Ⅰ |
| 142 | 左 | 小口 | 12 | 40 | 44 | 16,380 | 41.9 | 44 | 40 | 1.10 | 12 | Ⅲ |
| 143 | 左 | 小口 | 15 | 27 | 33 | 9,984 | 25.6 | 33 | 27 | 1.22 | 15 | Ⅲ |
| 144 | 左 | 詰 | 16 | 20 | 17 | 4,332 | 11.1 | 20 | 17 | 1.18 | 16 | Ⅰ |
| 145 | 左 | 詰 | 14 | 20 | 16 | 3,468 | 8.9 | 20 | 16 | 1.25 | 14 | Ⅰ |
| 146 | 左 | 小口 | 18 | 34 | 50 | 22,016 | 56.4 | 50 | 34 | 1.47 | 18 | Ⅲ |
| 147 | 左 | 小口 | 22 | 22 | 48 | 12,915 | 33.1 | 48 | 22 | 2.18 | 22 | Ⅱ |
| 148 | 左 | 詰 | 7 | 8 | 10 | 480 | 1.2 | 10 | 8 | 1.25 | 7 | Ⅰ |
| 149 | 左 | 詰 | 10 | 10 | 16 | 1,024 | 2.6 | 16 | 10 | 1.60 | 10 | Ⅰ |
| 150 | 左 | 詰 | 16 | 9 | 8 | 1,040 | 2.7 | 9 | 8 | 1.13 | 16 | Ⅰ |
| 151 | 左 | 小口 | 15 | 44 | 56 | 15,980 | 40.9 | 56 | 44 | 1.27 | 15 | Ⅲ |
| 152 | 左 | 長手 | 18 | 78 | 50 | 44,982 | 115.2 | 78 | 50 | 1.56 | 18 | Ⅳ |
| 153 | 左 | 平 | 62 | 127 | 30 | 132,480 | 339.1 | 127 | 62 | 2.05 | 30 | Ⅶ |
| 154 | 左 | 詰 | 10 | 16 | 16 | 1,890 | 4.8 | 16 | 16 | 1.00 | 10 | Ⅰ |
| 155 | 左 | 小口 | 13 | 15 | 30 | 5,408 | 13.8 | 30 | 15 | 2.00 | 13 | Ⅱ |
| 156 | 左 | 詰 | 16 | 20 | 16 | 5,434 | 13.9 | 20 | 16 | 1.25 | 16 | Ⅰ |
| 157 | 左 | 小口 | 12 | 26 | 64 | 15,732 | 40.3 | 64 | 26 | 2.46 | 12 | Ⅱ |
| 201 | 奥 | 小口 | 14 | 32 | 36 | 14,210 | 36.4 | 36 | 32 | 1.13 | 14 | Ⅲ |
| 202 | 奥 | 小口 | 16 | 32 | 52 | 20,160 | 51.6 | 52 | 32 | 1.63 | 16 | Ⅲ |
| 203 | 奥 | 長手 | 12 | 38 | 34 | 10,890 | 27.9 | 38 | 34 | 1.12 | 12 | Ⅲ |
| 204 | 奥 | 小口 | 20 | 36 | 40 | 18,088 | 46.3 | 40 | 36 | 1.11 | 20 | Ⅲ |
| 205 | 奥 | 長手 | 15 | 36 | 26 | 10,850 | 27.8 | 36 | 26 | 1.38 | 15 | Ⅲ |
| 206 | 奥 | 詰 | 10 | 20 | 12 | 1,800 | 4.6 | 20 | 12 | 1.67 | 10 | Ⅰ |
| 207 | 奥 | 詰 | 5 | 16 | 8 | 340 | 0.9 | 16 | 8 | 2.00 | 5 | Ⅱ |
| 208 | 奥 | 詰 | 21 | 18 | 13 | 3,024 | 7.7 | 18 | 13 | 1.38 | 21 | Ⅰ |
| 209 | 奥 | 平 | 108 | 80 | 20 | 99,960 | 255.9 | 108 | 80 | 1.35 | 20 | Ⅵ |
| 210 | 奥 | 平 | 83 | 64 | 18 | 65,835 | 168.5 | 83 | 64 | 1.30 | 18 | Ⅴ |

体積は実測図から換算した推定体積
重量は試料で計測した比重2.56を体積に乗じたもの

# 第6章　ま　と　め

## 北山3号墳墳丘築造過程（案）（第18図）

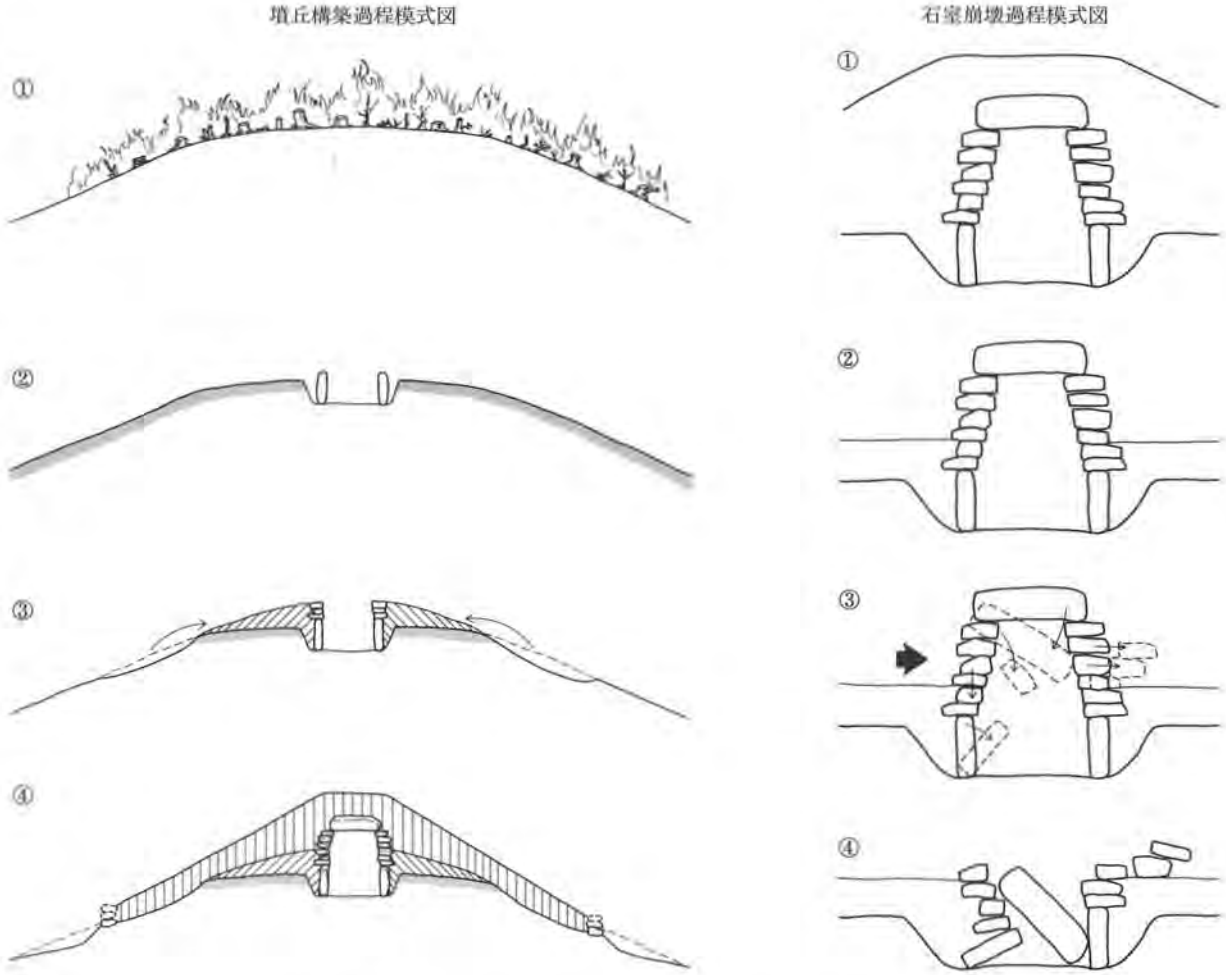
旧表土（焼土層）の検討から構築過程を推測した。

①墳丘を構築する山の頂上の木を伐採し、草木を焼き払う。焼土面（旧表土）が形成される。

②草木を焼き払った後、部分的に山を整形する（焼土が面であったり層であったりする理由）。墓坑を掘り、石室の構築を開始する。

③石室を構築する際、墓坑と石材の間に地山（炭化粒混じりの焼土・旧表土）の一部を削り、裏込めの石とともに入れ補強しながら石室を構築。（地山より高い部分も補強しながら構築）

④石室が完成し外護列石を据え、そこから盛土をして墳丘を整える。また外護列石より下を整形してテラス状の面をつくる（この部分の土も盛土に利用している可能性あり）。




第18図　墳丘構築過程模式図・石室崩壊過程模式図

## 北山３号墳の石室崩壊過程（案）（第18図）

北山３号墳の石室は崩壊しており、その原因として地震と思われる大きな力が加わったことが考えられると前述したが、石室にどのような状態で力が加わり崩壊したのか、その過程を考えてみたい。

①古墳が完成し、盛土が石室を覆っている。

②盛土が流失し、石室の上部が露出する。

③地震などによる大きな力が西方向から石室に加わる。

④石室の崩壊。右側壁は基底石の腰石が石室内に転倒し、その上の石材が下へ落ちる。奥壁に接する基底石や開口部石積みに接する基底石は接している石材が支えとなり転倒を免れる。左側壁は墳丘から露出していた部分の石材が大きく東方向に飛び出す。一斉にずれたため、移動した場所でも相互の石材の位置関係を保っている。

## 北山３号墳の位置づけ（第19図）（第２表）

北山３号墳の開口部の石室側へ一段下る構造は、竪穴系横口式石室の系譜をひくものと考えられる。しかし竪穴系横口式石室の定義は曖昧で、北山３号墳の石室は九州で見られる竪穴系横口式石室とは異なる。しかし、横穴式石室とは異なるものである。

美濃の初期横穴式石室には畿内系の片袖タイプと言われる上石津町の二又１号墳や系統のはっきりしない関市の陽徳寺１号墳などが見られる。最も多く見られるのは開口部から石室に１段下がって入るタイプであるらしいが、一部については竪穴系横口式石室とされ、他のものは横穴式石室とされるなど分類に混乱が見られるようである。ここでは管見にのぼった該期の横穴式石室の内、石室側が一段下ると考えられるものについて検討を加える。方法としては、立地、石室プラン、開口部の地山掘り込みの有無等いくつかの要素に分解し、その組み合わせから何が言えるか考えたい（表２）。

**検討**

①このタイプの石室は山の頂上や尾根上の高いところに築かれる傾向がある。

②開口部の掘り込みの有無と排水溝の有無は構築上対応関係にあり、排水溝を持たないものはいずれも開口部に掘り込みがある可能性が高く、排水溝を持つ半ノ木洞古墳と北山３号墳の例はいずれも掘り込みを持たない。

③石室プラン、側壁形状に関しては他の要素との有意の対応関係はわからない。

④これらの石室は、どれ一つとっても全てが一致するものはなく、共通点は石室側へ一段下ることだけである。

⑤石室側が一段下る構造をもつ石室は岐阜市以東に偏在する傾向にあり、また時期的にも古いものが目に付く。西濃地域ではこの時期の横穴式石室が少なく、東部地域に比べ横穴式石室の導入が遅れていた可能性がある。

⑥一段下る構造の石室は周辺地域では西三河地域で見られるが、北山３号墳のように排水溝を持つものは見あたらない。また東三河地域で排水溝をもつものが多く見られるが、時期的には北山３号墳よりも下る。

⑦これらの古墳の築かれた時期には、美濃地域の中濃から西部域では宇田型甕(台付甕)、東部域では平底甕が使用され、岐阜市がその境にあたる。岐阜市以東の地域は一環して平底甕を使用する文化圏で、交流が盛んであったと思われる。こういった地域のまとまりのなか、一段下る構造をもつ石室は岐阜市以東の地域に受け入れられたと考えられる。

北山3号墳は美濃の東部域の広い範囲で受け入れられた石室をもつ古墳である。このような石室を構築する技術は北山3号墳より時期は下るが、長良川の右岸の三輪地域にある大廻(おめぐり)2号墳に受けつがれる。大廻2号墳は横穴式石室であるが「腰石」を持ち、北山3号墳の技術的な系譜を引くものと考えられる。

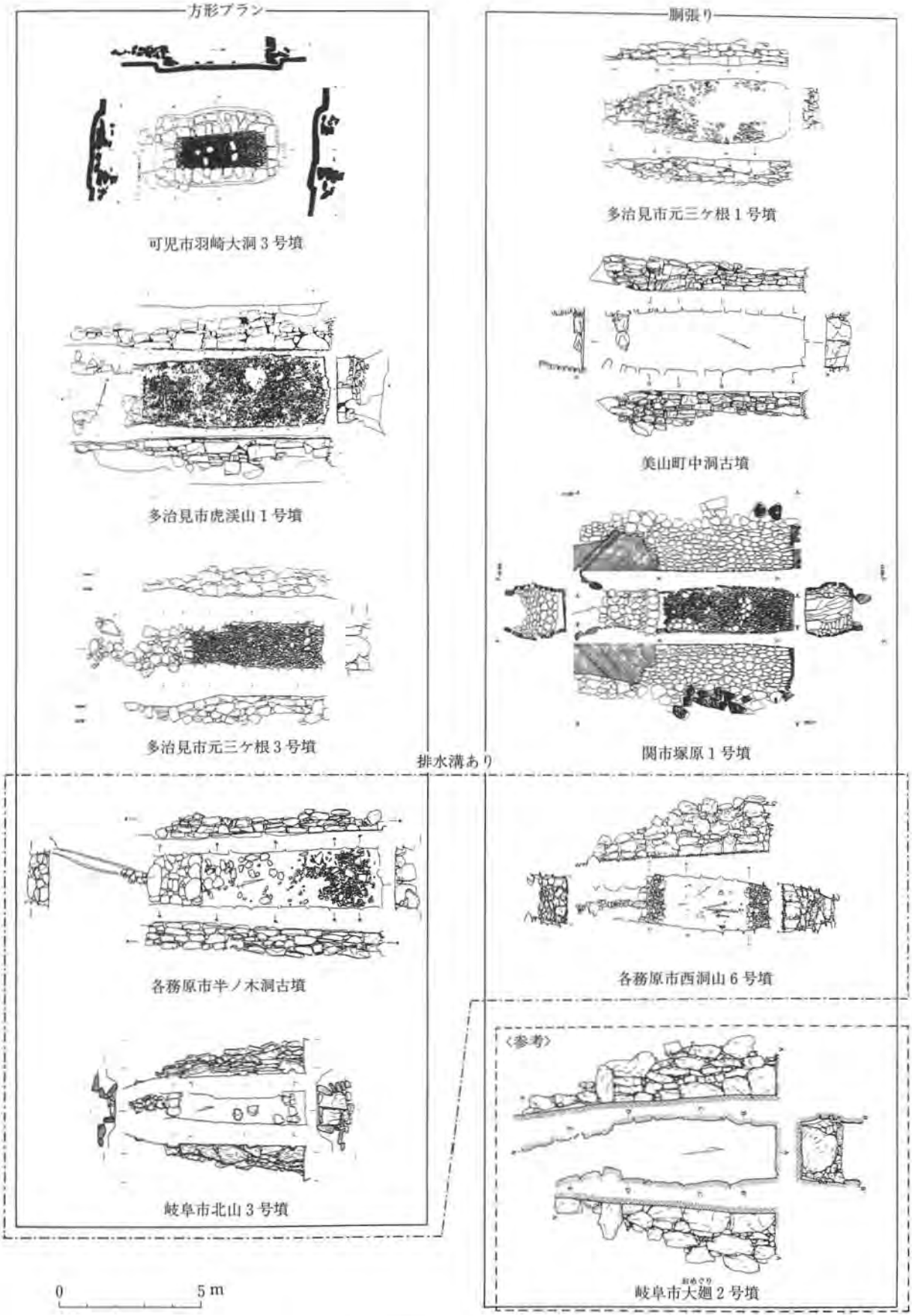
美濃地域（東部域）において、石室側へ一段下る構造の石室は、本格的な横穴式石室の導入以前の一時期、もしくはその後にも普遍的見られるものではないかと考えられる。　　（内堀・井川）

**第2表**　北山3号墳類似石室をもつ古墳一覧（単位m）

| 市町村 | 古墳名 | 墳形 | 直径 | 外護列石 | 立地 | 石室プラン | 玄室全長 | 腰石 | 開口部の地山掘り込み | 排水溝 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 多治見市 | 虎渓山1号墳 | 円 | 12.5 | ○ | 丘陵頂 | 方形 | 6.8 | ○ | ○ | × |
| | 元三ケ根1号墳 | 円 | 9.0 | ○ | 尾根上 | 胴張り | 4.52 | ○ | ? | × |
| | 元三ケ根3号墳 | 円 | 8.5 | ○ | 尾根上 | 方形 | 4.5*1 | × | ? | × |
| | 羽崎大洞3号墳 | 円 | 12.0 | × | 尾根上 | 方形 | 3.15 | × | ○ | × |
| 美山町 | 中洞古墳 | 円 | ? | ? | 台地先端 | 胴張り | 6.1 | × | ? | × |
| 関市 | 塚原1号墳 | 円 | 12.5 | ○ | 山麓緩斜面 | 胴張り | 4.53 | × | ? | × |
| 各務原市 | 半ノ木洞古墳 | 円 | 10.0 | × | 山頂 | 方形 | 6.2 | × | × | ○ |
| | 西洞山6号墳 | 円 | 12.0 | ○ | 山麓 | 胴張り | 4.3 | × | × | ○ |
| 岐阜市 | 北山3号墳 | 円 | 10.5 | ○ | 山頂 | 方形 | 4.3 | ○ | × | ○ |
| | 船来山71号墳*2 | ? | ? | × | 尾根上 | 胴張り | 3.7 | × | ○ | × |
| | 船来山105号墳*3 | ? | ? | × | 尾根上 | 胴張り | 4.07 | × | ○ | × |

＊1 元三ケ根3号墳の玄室長は奥壁から開口部の一段下がる部分までの数値

＊2・3 未報告。恩田裕之氏御教示。




第19図　北山３号墳類似石室集成

## 参考文献

〈報告書〉

・1976　関市教育委員会　関市文化財第３号『陽徳寺裏山古墳群』

・1979　『岐阜市史』資料編　考古・文化財

・1985　可児市教育委員会　『羽崎古墳群』

・1977　岐阜市教育委員会　『大廻古墳群発掘調査報告書』

・1987　各務原市教育委員会　各務原市文化財調査報告書第４号『桑原野山１号古墳発掘調査報告書』

・1987　各務原市教育委員会　各務原市文化財調査報告書第５号『半ノ木洞古墳発掘調査報告書』

・1989　関市教育委員会　『塚原遺跡・塚原古墳群』

・1991　各務原市教育委員会　各務原市埋蔵文化財調査報告書第９号『西洞山古墳群発掘調査報告書』

・1993　美山町教育委員会『中洞古墳』

・1993　岐阜県文化財保護センター　岐阜県文化財保護センター調査報告書第９集『元三ヶ根古墳群・白土原９・10号古窯跡』

・1994　岐阜市教育委員会　岐阜市文化財報告1993-1『上城田寺古墳群』

・1995　豊田市教育委員会　豊田市埋蔵文化財発掘調査報告書第１集『京ヶ峰１号墳・谷下古墳』

・1996　多治見市教育委員会『虎渓山１号古墳発掘調査報告書』

・1996　岐阜市教育委員会　岐阜市文化財報告1996-1『岐阜市遺跡詳細分布調査報告書』

・1997　大垣市教育委員会　大垣市埋蔵文化財調査報告書第６集『曽根八千町遺跡』

・1997　岐阜市教育委員会　岐阜市文化財報告1997-1『平成８年度岐阜市市内遺跡発掘調査報告書』

〈論文〉

・1982　柳沢一男「竪穴系横口式石室再考―初期横穴式石室の系譜―」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』下巻

・1983　蒲原宏行「竪穴系横口式石室考」『古墳文化の新視角』

・1985　成瀬正勝「横穴式石室の型式と変遷」『岐阜史学』79

・1988　永嶋正春「耳環の素材と製作技法について―Ｘ線による調査結果をもとにして―」『井上コレクション弥生・古墳時代資料図録』

・1988　愛知大学日本史専攻考古学部会『西三河の横穴式石室』

・1990　成瀬正勝「美濃における畿内系横穴式石室の受容と展開」『岐阜史学』85

・1992　土生田純之「横穴系の埋葬施設」『古墳時代の研究７　墳丘と内部構造』

・1992　中井正幸「岐阜県の横穴式石室」「岐阜県横穴式研究序説」大垣市教育委員会　大垣市埋蔵文化財調査報告書第１集『花岡山古墳群』

・1993　美濃古墳文化研究会『美濃の後期古墳』

・1994　三河考古学談話会　三河考古第６号『東三河の横穴式石室　資料編』

・1996　渡辺博人「美濃の後期古墳出土須恵器の様相―蓋坏の型式とその編年試案―」『美濃の考古学』創刊号

・1997　横幕大祐「いわゆる外護列石について」『美濃の考古学』２号

# 第7章　分　　析

## 北山3号墳出土炭化材の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

### 1．はじめに

岐阜市北山に所在する、北山3号墳の石室内や盛土そして古墳構築時の旧表土面から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。

北山3号墳は、標高130m前後の尾根の頂部に構築されている6世紀中頃～後半の石室古墳である。発掘に伴い石室周囲には炭化材を散在する焼土が分布していた。この焼土は古墳構築時に整地の為に周囲の木々を焼いた痕跡と推定され、炭化材は当時の植生の一部を知る手がかりとなるため炭化材の樹種同定を依頼された。石室内や盛土から採取された炭化材もその発掘産状から、周辺焼土の落ち込みや移動によるものと考えられている。遺跡周辺は現在は、アカマツを主としてナラ類・ネズ・ツツジ類・ヒサカキなどからなる典型的な里山の林（二次林）に囲まれている。しかし当地域一帯が、古墳時代はどのような植生であったかはほとんど知られていない。植生環境と人間活動との関係を考えてゆく上で植物遺物からの情報蓄積は必要であり、当遺跡の旧表土から検出された炭化材は当時の低山地の植生環境を知る貴重な資料となる。

### 2．試料と樹種同定の方法

先ず、採取した炭化材を自然乾燥し、その後に炭化材の横断面（木口）は手で割り実体顕微鏡で分類群のおおよその目安をつける。次に横断面だけでは同定できない試料（アカガシ亜属・コナラ節・クヌギ節・クリ以外）については、3方向の破断面の組織を走査電子顕微鏡で観察し同定を決定する。またコナラ節やクヌギ節などでも、年輪幅の狭いぬか目や逆に年輪幅の広い試料などは実体顕微鏡下では誤同定の恐れがあるので、このような試料については走査電子顕微鏡で確認し同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、横断面の他に、接線断面（板目）と放射断面（柾目）は片刃の剃刀を各方向に沿って軽くあて弾くように割り平滑面を出し、この3断面を5㎜角以下の大きさに整え、直径1㎝の真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗る。試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

### 3．結果

試料ごとの同定結果を表に示した。

同定結果は、ほとんどがマツ属複維管束亜属であり、旧表土からの試料１５点のうち１１点を占め、石室内と盛土から一括採取された試料もマツ属複維管束亜属の破片がほとんどであった。このほかにシャシャンボとクリが各2点、そして組織の状況が悪いためマツ属と針葉樹までの同定でとどまった試料が各1点づつあった。なお焼土№7からは、マツ属複維管束亜属とクリの2分類群が検出された。

以下に、樹種同定の根拠とした材組織を記載する。

**表** 北山3号墳（6世紀中頃～後半）出土炭化材の樹種同定結果

| 試　料 | 樹　種 | 試　料 | 樹　種 |
|---|---|---|---|
| 焼土No.1 | マツ属 | 焼土No.10 | マツ属複維管束亜属 |
| 焼土No.2 | マツ属複維管束亜属 | 焼土No.11 | 針葉樹 |
| 焼土No.3 | マツ属複維管束亜属 | 焼土No.12 | マツ属複維管束亜属 |
| 焼土No.4 | マツ属複維管束亜属 | 焼土No.13 | マツ属複維管束亜属 |
| 焼土No.5 | シャシャンボ | 焼土No.14 | クリ |
| 焼土No.6 | マツ属複維管束亜属 | 焼土No.15 | マツ属複維管束亜属 |
| 焼土No.7 | マツ属複維管束亜属 | 石室内一括 | マツ属 |
| 焼土No.7 | クリ？ | 石室内一括 | マツ属複維管束亜属（複数） |
| 焼土No.8 | マツ属複維管束亜属 | 石室内一括 | シャシャンボ |
| 焼土No.9 | マツ属複維管束亜属 | 盛土一括 | マツ属複維管束亜属（複数） |

同定された樹種の材組織記載

1) マツ属複維管束亜属　*Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.　マツ科　写真図版1　1a.-1c.（焼土No.3）

垂直・水平樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材。分野壁孔は窓状。放射組織の上下端に放射仮道管があり、その内腔には鋸状の肥厚が顕著である。以上の形質からマツ属複維管束亜属の材と同定した。マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが属し、この2種は放射仮道管内壁の肥厚の程度により、鋭く尖るアカマツと肥厚がなだらかなクロマツとに識別される。しかし炭化材では内腔に張り出た肥厚部分は捉えられないため種までは確定できなかった。

マツ属は、上記マツ属複維管束亜属と同様な形態であるが、放射仮道管内壁の肥厚状態が不明な試料である。

2) クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　写真図版1　2a.-2c.（焼土No.14）

年輪の始めに中型～大型の管孔が1層配列し孔圏部を形成し、晩材部は小型～非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の内腔には泡状のチロースが顕著である。広放射組織がないことからクリと同定される。通常は、クリの放射組織は単列同性であるが、当試料は2細胞幅で異性である。また横断面の孔圏部も管孔配列がやや乱れている。この様な点から、この試料は根材または節部の部位思われる。

焼土No.7のクリ？は、組織が脆くやや状況の良い一部の横断面を電子顕微鏡で観察した結果、孔圏部と晩材部は小道管が火炎状に配列するのが見られた。広放射組織は見られなかったが、観察面が狭いためコナラ節の可能性もある。

3) シャシャンボ　*Vaccinium bracteatum* Thunb.　写真図版1　3a.-3c.（焼土No.5）

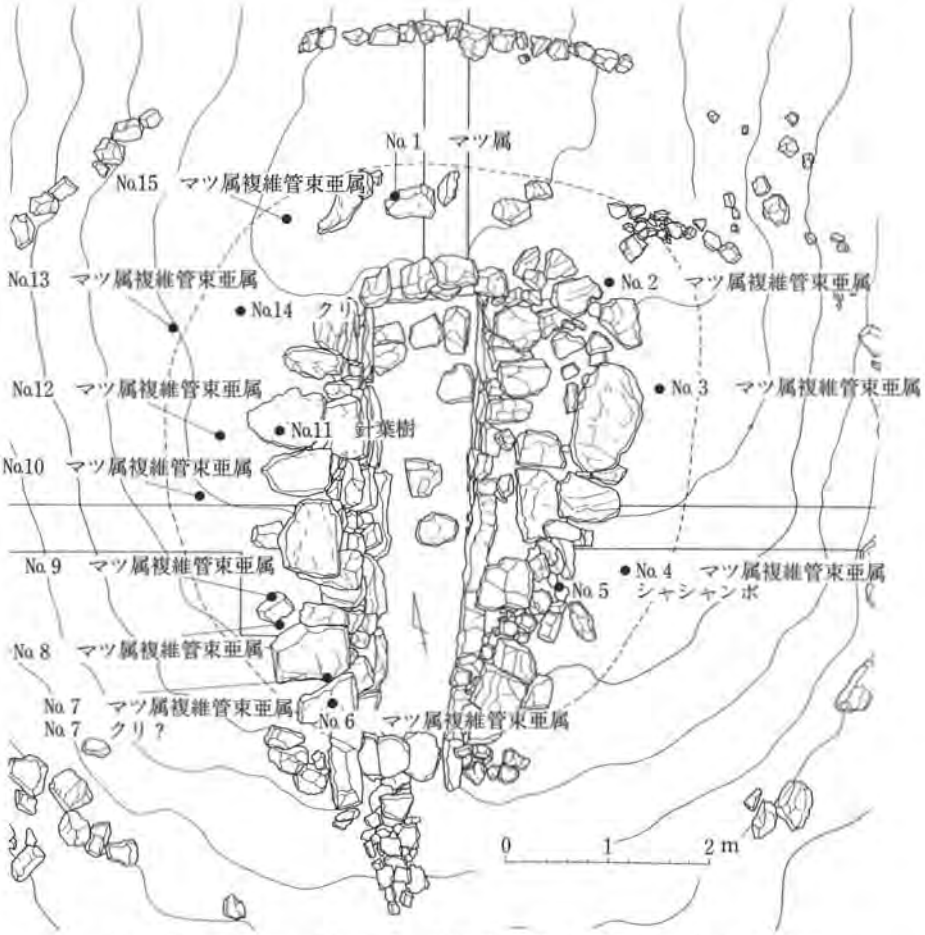
非常に小型で多角形の管孔が密在し年輪界でわずかに径を減じ、幅広の放射組織が顕著な散孔材。穿孔は単一穿孔と横棒数が10本前後の階段穿孔がある。道管の壁孔は交互状から階段状、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は異性、平伏・方形・直立細胞が混在する2～4細胞幅の放射組織は細胞高が高く、単列の放射組織は接線断面においてツツジ科の材に多く見られるレンズ状のおおきな直立細胞からなる。

## 4．まとめ

北山３号墳の構築時に焼却された林跡の一部と推定される炭化材は、マツ属複維管束亜属が最も多く検出され、ほかにクリ、シャシャンボ、マツ属、針葉樹が少数であった。産状は、マツ属複維管束亜属が広く均一に見られ、クリとシャシャンボも散点的に検出された(第20図)。現在も遺跡周辺の尾根筋にはアカマツが多く、炭化材からは種を特定することはできていないが古墳が構築された時期にはすでにマツが優占する林が成立しており、６世紀中頃～後半には低山地の二次林の植生景観と類似した植生になっていたようである。

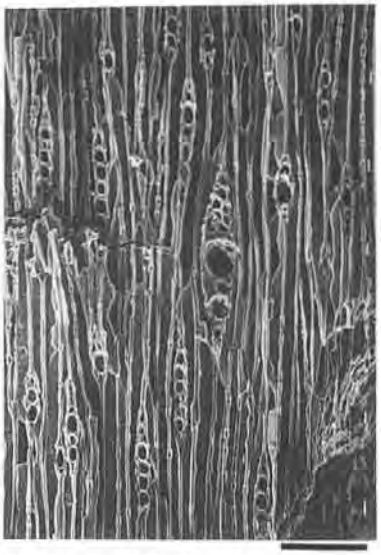
### 参考文献

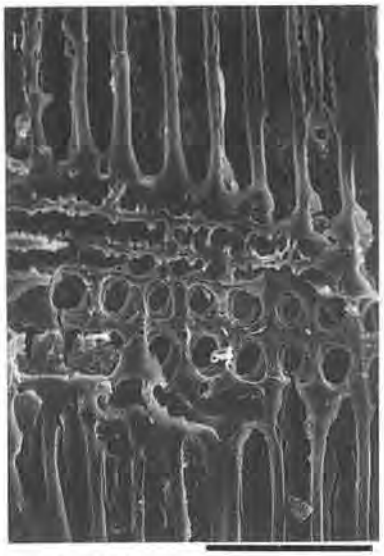
岐阜県現存植生図　岐阜、1981、環境庁。



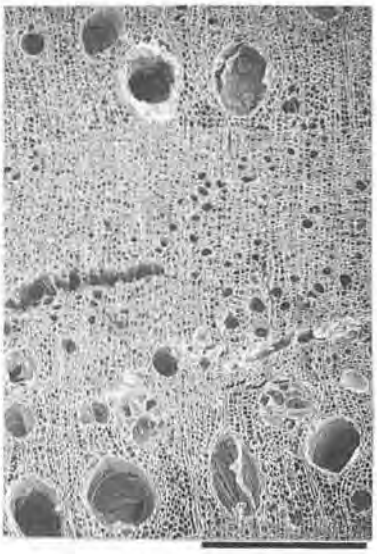

**第20図**　旧表土（焼土面）より出土した炭化材の位置と樹種

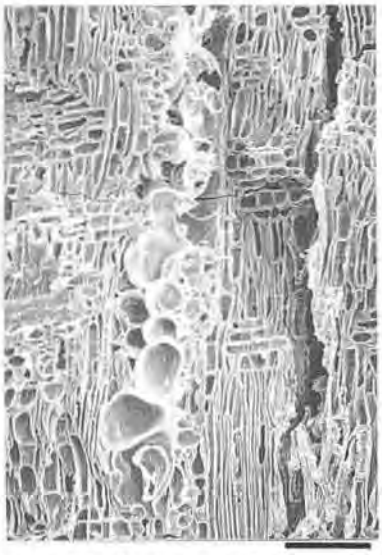
写真図版1　北山3号墳出土炭化材



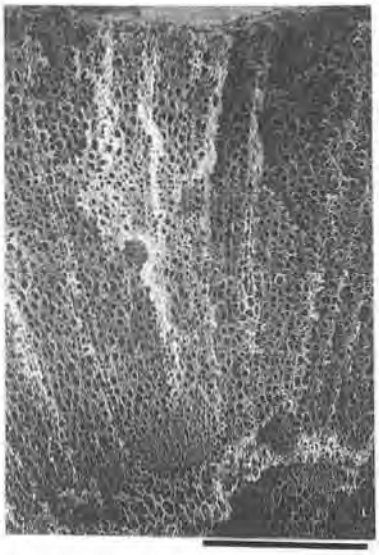


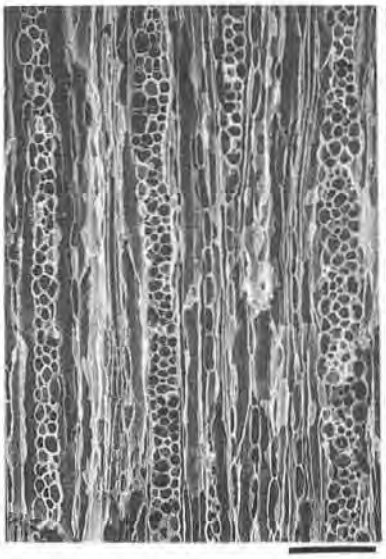
1a. マツ属複維管束亜属（横断面）　焼土No.3　bar：0.5mm　1b. 同（接線断面）　bar：0.1mm　1c. 同（放射断面）　bar：0.05mm





2a. クリ（横断面）　焼土No.14　bar：0.5mm　2b. 同（接線断面）　bar：0.1mm　2c. 同（放射断面）　bar：0.1mm





3a. シャシャンボ（横断面）　焼土No.5　bar：0.5mm　3b. 同（接線断面）　bar：0.1mm　3c. 同（放射断面）　bar：0.1mm

調査前風景（南から）

調査前風景（北から）

石室内天井石崩落状況（南から）

天井石（東から）

石室検出状況（南から）

石室検出状況（北から）

石室検出状況　右側壁（南東から）

石室検出状況　左側壁（南西から）

墓坑・基底石検出状況（南から）

墓坑・基底石検出状況（北から）

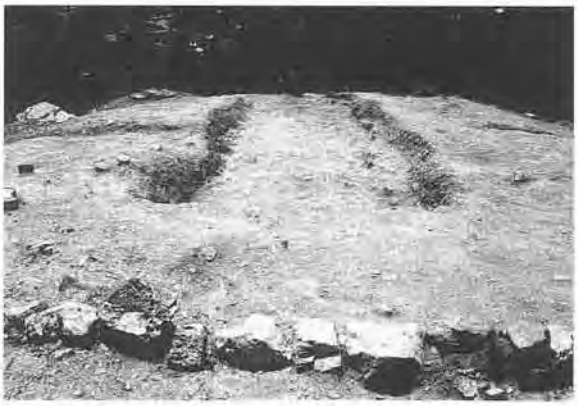
墓坑・基底石検出状況（東から）

基底石検出状況（石室内奥壁側から）

基底石復元状況（南から）

基底石復元状況（北から）

墓坑完掘状況（南から）



墓坑完掘状況（北から）

外護列石検出状況（南から）

外護列石検出状況（北から）

外護列石検出状況（北西から）

外護列石検出状況（南西から）

外護列石検出状況（南東から）

石室奥壁後方の石列（西から）

旧表土検出状況（北から）

写真図版5

閉塞石検出状況（石室内から）

開口部石積み検出状況（石室内から）

開口部石積み検出状況（東から）

排水溝検出状況（西から）

閉塞石検出状況（東から）

排水溝検出状況（南から）

排水溝蓋石除去後（南から）

排水溝蓋石除去後（石室内から）

遺物出土状況（3・5～10・12）

遺物出土状況（3・5～10・12）

遺物出土状況（1・2）

遺物出土状況（4・11）

遺物出土状況（13～16）

遺物出土状況（17・18）

出土遺物　須恵器杯蓋(1)

出土遺物　須恵器杯身(2)

出土遺物　須恵器杯身(3)

出土遺物　須恵器短頸壺(7)

出土遺物　耳環（17・18）

出土遺物　須恵器杯蓋(11)

出土遺物　須恵器杯蓋(14)

出土遺物　須恵器高杯(9)

須恵器(2)　当て具痕

須恵器(8)　当て具痕

㈶岐阜市教育文化振興事業団報告書第２集

岐阜市　北山３号墳

平成10年７月

発行　㈶岐阜市教育文化振興事業団
　　岐阜市明徳町10番地
印刷　西濃印刷株式会社
　　岐阜市七軒町15番地